

サタンの反乱 艱難期への序章 第三部:

人間の目的、創造と墮落

—ロバート・D・ルギンビル博士 (Dr. Robert D. Luginbill)

(オンラインでもご覧いただけます。www.ichthys.com)

シリーズの目次: サタンの反乱 艱難期への序章

第1部: サタンの反乱と墮落

第2部: 創世記の空白期(ギャップ)

第3部: 人間の目的、創造と墮落

第4部: サタンの世界システム: 過去・現在・未来

第5章: 裁き、回復、取り換え

第3部の内容

I. 人間の目的

II. 人間の創造

1. 神のかたちと似姿

2. アダムの創造

3. 人間の霊

4. 人間の二分説

5. イブの創造

III. 楽園の現状

IV. 人間の墮落

1. 誘惑

2. 墮落

3. 裁き

V. サタンの中途半端な勝利

はじめに： 前回私たちが見てきたように、地球が回復し、神が天の光を元に戻されるまで、「光の番人」であるルシファーとその従者たちは、暗闇の中で運命を待っていました。サタンのクーデターは失敗に終わり、原初のエデンの地球での邪悪な試みは、神の介入によってあっけなく終了し、地球だけでなく周辺の宇宙も深い闇に埋もれてしまったのです。聖書の証言によると、神はサタンとその墮天使たちが神の権威を拒絶し、反逆したことを非難する判決が下されたことが分かります。

見よ、彼はそのしもべをさえ頼みとせず、その天使をも誤れる者とみなされる。(ヨブ記 4 章 18 節)

…わたしを離れて、**悪魔とその使たちとのために**[すでに]**用意**されている永遠の火にはいってしまえ。(マタイ 25 章 41 節)

さばきについてと言ったのは、この世の君がさばかれるからである。(ヨハネ 16 章 11 節)

このように、サタン(とその従者)の事件はすでに裁かれ、その究極の運命が宣告されています。大艱難期にサタンとその墮落天使たちが地上に投げ落とされる頃には(黙示録 12 章 7-9 節)、サタンは自分に「わずかな時間しか残されていない<自分の時が短い>口語訳/新改訳IV」(黙示録 12 章 12 節)という事実をよく理解することになります。人類の歴史が終わる時、それもキリストの千年王国の終わりになってから、サタンは人類の歴史が始まる前に下された判決の執行を受けることになります(黙示録 20 章 10 節、イザヤ 24 章 21-22 節)。「なぜ裁きを遅らせたのか?」という疑問が湧くかもしれません。なぜ神は、悪魔とその手下を、正当な判決が下された時、すぐに地獄の火の中に突き落とさなかったのか? このような疑問に対する答えは、神が、感

知する力と道徳的責任を持つ別種の被造物である人間を創造したと密接に関係しています。これから、私たちは今、人類の目的、創造、墮落について考えていくことにします。

1. 人間の目的

サタンは、神の宇宙の支配を覆そうと目論み、かつ悔い改めることをしないために、すでに死の宣告を受けていますが(ヨブ 4 章 18 節; マタイ 25 章 41 節; ヨハネ 16 章 11 節)、行動の自由はまだ残されています。私たちの最初の両親を園で見張っていたり(創世記 3 章)、主の前に現れて兄弟を中傷したり(ヨブ記 1 章 2 章、ゼカリヤ 3 章、黙示録 12 章 10 節)、目をさまして防衛していない信者を探して地上を歩き回ったり(ペテロ第一 5 章 8 節)しています。悪魔が人間に強い関心を持っている理由は、そもそも人間が創造された理由に関係しています(また、悪魔が受けている死の宣告の執行が遅れている理由にも関係があります)。人間とは、**サタンの反逆に対する応答**であり、神のご性格について悪魔が誹謗中傷することに対する生きた反証を意味します。神が人間を創造したのは、1) 被造物をご自身と**和解させる神の能力**をすべての天使に示すため、2) 悪魔の離反によって失われた **すべてのものを実際に置き換える**ため、です。

1. 人間は、神の慈悲深い義を示すために創造されました：神の完全な性格のすべての側面は、人類に対する神の慈悲深い対応に現れていますが、私たちの救いを示す神の義こそ、神は関係を元に戻すことはできないとするサタンの非難に対する率直な応答なのです。このシリーズの第 1 部では、悪魔が自分の支持者を得ようとして、神はご自身と反抗的な被造物との間に和解を成立させることができないと説得したのです。サタンは、神御自身の義によって憐れみを示すことができず、赦しは不可能だと考えたのです。妥協せずには憐み深い行動をとることができず、自分の造られた被造物を台無しにすることなどできないのだから、罰を与えることもできないはずだという「型」に神をはめ込んでいました。神がそれをどんなに好きでなくても、神はサタンが権力を篡奪することを容認せざるを得ないという主張です。公に言わないまでも、悪魔は間違い

なく「＜味方の＞数を盾に」しようとしていたはずで、神が一人の反逆者を懲らしめたとしても、サタンが集めた大勢の天使を取り除こうとでもするなら、宇宙の構造に取り返しのつかない亀裂を生じさせることになるだろうと考えたのです。しかし、悪魔の論理は、神の計り知れない愛を考慮に入れておらず、私たちの神が、私たちのために、ご自分の最もかけがえのない宝である御子イエス・キリストを犠牲にするほど、恵みに満ちた神であるということには思いが及ばなかったのです。サタンは、神の義によって、神の憐れみがどんな形であれ勝手に罪を赦すことができないということについては正しかったのですが、悪魔が計算に入れなかったのは、私たちが神の御前に義と認められるように、神が御子を犠牲にされて自ら罪を償おうとされたことです(コリント第二 5 章 21 節)。

わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の**力**である。**神の義**は、その福音の中に**啓示され**、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである。(ローマ 1 章 16-17 節)

私たちは、私たちの代わりに死に、私たちの罪の代価を支払って下さった方、私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストというお方に対する信仰と彼のなして下さった働きによって救われます。イエス様が代価を支払って下さったので、神様は私たちの罪を気まぐれにではなく、最も尊い代価の支払いに対する正当なこととして赦して下さいのです。そのため、神様は、私たちがイエス様を信じたときに、私たちを赦し、ご自分の家族に迎え入れて下さる慈悲深い方であるだけでなく、私たちを義として下さったのです。神は「**私たちが行った義の行いによってではなく**」(テトス 3 章 5 節)、私たちのために死んでくださった方の働きを私たちが受け入れることによって、私たちを義と宣言して下さいる正義の方でもあります。天使は、(第 1 部で)見てきたように、天使なので神に反抗するという決定は最終的なものでした。天使は人間の物質的限界をはるかに超えた知覚能力を持っているので、(少なくとも、生き物が知るのを許されている限りにおいて)「自分が何にかかわろうとしているのか承知の上だった」と言えるでしょう。墮落した天使が慈悲深い神と和解するということは、可能性としてあまり考えられないことでしたが、それは**彼らが望んでいない**からであって、神がそれをできない、あるいはしないから**ではない**のです。¹ 神が人類に対する愛のゆえに代価としてご自分の御子を犠牲にされたことの真理は深すぎて、私たちはかすかにそれを理解するにすぎません。もし悪魔とその天使たちが、このような比類のない犠牲と慈悲の申し出を受け取る心を持っていたなら、神は惜しみなくそれを提供したことでしょう。神は御子を

¹ 特にヘブル 2 章 16 節参照のこと「【新改訳 2017】当然ながら、イエスは御使いたちを助け出すのではなく、アブラハムの子孫を助け出してくださるのです。」。

十字架にかけて被造物を救われるという御心と御力の両方を疑いの余地なく示されたのでした。神の正義が要求する代価を御子の血で支払うという犠牲を、神は私たちのためにして下さったのです。

このように、人類の歴史は、一方では神の慈悲を示しながら、また同時にその慈悲を与えられることで(ご自身に多大な犠牲を強いたとしても)公正に行動される神の能力を、天使達(選ばれた天使らと墮落した天使ら)に示すものです。私たち人間は、悪魔の反対にもかかわらず、神がこの世界で私たちに与えて下さる神の愛と慈悲を実際に経験しています。しかし、天使にとっては、私たちは、イエス・キリストの犠牲と私たちのイエス・キリストへの信仰によって創出された愛と慈悲の表明なのです。天使は霊であり、私たち肉体を持つ人間の心を試すような物質的な制限を受けないので、天使達は私達を熱心に観察によって学ぶしかありません(ヨブ記 1 章 2 章; マタイ 18 章 10 節; ルカ 15 章 10 節; コリント第一 4 章 9 節; 11 章 10 節; ペテロ第一 1 章 12 節)。² こうした愛の表明が(人類の歴史がついにその課程を終了する時まで)七千年以上にわたって行われることは、神の恵みと寛容をさらに証明するものです(イザヤ 30 章 18 節; ローマ 2 章 4 節、ペテロ第二 3 章 9 節; 3 章 15 節など)。この表明の長い過程(私たち人間の集合的な経験)を通して、選ばれた天使たち<墮落しなかった天使達>は神とその完全なご性格をこれまで以上によく知るようになり、一方、墮落した天使たちは、自分たちのリーダーのあらゆる冒流的な告発が反論され、あらゆる細部にわたって打ち負かされるのを見ることになります。そして、そのすべてが終わったとき、信じる人達に対する慈悲深い救いの中で、神の義は非難の余地のないものとして確証され、疑いの余地のないものとして証明されるのです。

2. 人間はサタンとその天使たちにとって代わるために創造されました：創世記の空白期の裁きとその後になされた人間の創造の二つの出来事は、密接に関係していることを示しています(前第2部参照)。神が天使と同じような霊性と自由意志を持つ新種を創造され、それをサタンの反抗的な活動の現場に置かれたことは、神の人類に対する目的の少なくとも一つが、悪魔とその邪悪な軍団に取って代わることであることを端的に示しています。道徳を備えた新しい被造物は、自分たちがしようとしなかったことを、つまり神に反抗することをせず神に従うことをするかもしれないということを、サタンはすぐに理解できたに違いありません。つまり子孫繁栄によって必要な数に達した時点で、サタンとその仲間は排除され、全体性と完全性が回復されるということです。結

² この原則のより詳細な展開については、ペテロ#22 を参照してください。この問題は、このシリーズのパート 1 でも取り上げています。

局のところ、裁きはすでに宣告されているのですから(ヨブ記 4 章 18 節; マタイ 25 章 41 節; ヨハネ 16 章 11 節)。人間の数が十分になれば、墮落した天使と人間が一对一で入れ替わる以外に何が残るでしょうか? 判決が下された以上、悪魔に対する神の刑罰の執行は、すぐにではないにしても避けられないでしょう(黙示録 20 章 10 節参照)。

その日(主の日)、主は天において、天の軍勢(悪魔とその天使たち)を罰し、地の上で、地のもろもろの王(キリストに敵対した者たち)を罰せられる。彼らは囚人が土ろうの中に集められるように集められて、獄屋の中に閉ざされ、**多くの日を経て後、罰せられる**。(イザヤ 24 章 21-22 節)

したがって、天使とは違って子孫を残すことができる被造物である人間が創造されたことで、サタンの処刑に唯一残されている明らかな障壁が、事実上取り除かれるのは時間の問題でした。

失われたものを取り戻し、失われたものを後任で置き換えたいという神の主な願いは、失われた羊のたとえ(マタイ 18 章 12-14 節; ルカ 15 章 4-10 節)、義兄弟婚(レヴィアート婚)の律法(申命 25 章 5-6 節)、そしてもちろん、全人類がイエス・キリストの賜物を受け入れて神のもとに戻ることを切望していることは、聖書にはっきりと示されていることです(エゼキエル 18 章 23 節、マタイ 18 章 14 節; ヨハネ 12 章 47 節; ペテロ第二 3 章 9 節参照)。

神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。(テモテ第一 2 章 4 節)

神の変わることのない秩序の中で、選ばれた人類が事実上、墮落した天使に取って代わることを示唆する十分な証拠があります(ルカ 10 章 17-20 節; コリント第一 6 章 3 節; 黙示録 20 章 4 節)。この原理は、神人<イエス>が元々の翼で覆うケルブに取って代わったことに最もはっきりと現れています(第 1 部参照)。ルシファー(「光を担う者」)が、明けの明星であるイエス・キリストに取って代えられたのです(イザヤ 14 章 12 節; ペテロ第二 1 章 19 節; 黙示録 2 章 28 節; 22 章 16 節参照)。したがって、ルシファーの従者に代わって、明けの明星の従者が登場するのは当然のことなのです。このようにして、被造物の全体性と完全性が回復され、失われたものはすべて、より良いものに置き換えられます。それは、神の御子である神人と結びついて神を喜んで崇拜する人たちであり、最終的には「神が、すべてにおいてすべてとなられる」(コリント第一 15 章 28 節 新改訳 IV)ようになるのです。人間の墮落を引き起こしたサタンの動

機は明らかです。悔い改める気もなく、また新たな種族＜人間＞を受け入れることもできなかったのです。

3. 人は神の栄光のために創造されました：サタンとその追従者が、喜んで崇拝する者にとって代われ、罪深い人間を救うために御子を犠牲にされたことを通して神の愛と義が十分に示されたことは、大いに神に栄光を帰すことになります。人間の歴史の出来事を見た後、選ばれた天使たち(事実、すべての被造物)は、全能の主の無比の恵みを賛美しています(詩篇 148 篇-150 篇参照)。

御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、
世々限りなくあるように。(黙示録 5 章 13 節後半)

私たちが創造されたのは、神の賛美のため、神の栄光のためです(イザヤ 60 章 21 節; ヨハネ 17 章 10 節; 21 章 19 節; ローマ 9 章 23 節)。私たちを造られ、キリストによって救って下さることによって、神はご自身の愛を示し、悪魔の嘘を暴かれます。私たちの中に、私たちのためにして下さったことの中に、神の栄光が輝いていて、神を愛する者は神を賛美せずにはられません:

わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、[神の]愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである。これは、その愛する御子によって賜った栄光ある恵みを、わたしたちが**ほめたたえるため**である。(エペソ 1 章 5-6 節)

わたしたちは、御旨の欲するままにすべての事をなさるかたの目的の下に、キリストにあってあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである。それは、早くからキリストに望みをおいているわたしたちが、**神の栄光をほめたたえる者**となるためである。(エペソ 1 章 11-12 節)

すべてわが名をもってとなえられる者をこさせよ。**わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた**」。(イザヤ 43 章 7 節)

上記の文章が示すように、墮落した天使の種類に代わって形成される階級は、再生した人間(すなわち、キリストを信じる者)だけです。神の恵みであるイエス・キリストの贈り物を拒むことを選んだ人間は、火の池で悪魔とその従者たちと運命を共にすること

になります(黙示録 20 章 11-15 節)。これもまた、神の義を示す一部であり、神の偉大な栄光につながるものです。

全宇宙が、神に立ち返るすべての人に対して神が慈悲をもって備えておられるのを目にするだけでなく、神の御心に逆らうすべての者、サタンとすべての反逆者は、天使であれ人間であれ、物質的にも(裁きにおいて)、また霊的にも(人間の歴史の中での実証を通して)撃ち碎かれることになります(詩篇 76 篇 10 節参照)。そして、反逆者であれ再生者であれ、すべての人が最終的に神の威厳、義、栄光を認めるようになります。

わたしは自分にかけて誓う。わたしの口から恵みの言葉が出されたならば、その言葉は決して取り消されない。わたしの前に、すべての膝はかがみ、すべての舌は誓いを立て恵みの御業と力は主にある、とわたしに言う。主に対して怒りを燃やした者はことごとく主に服し、恥を受ける。(イザヤ 45 章 23,24 節)

神のご性質は、嘘を見逃すことではなく、すべての嘘を真実のまばゆい光の中にさらすことです。人間の歴史は、事実上、墮落した天使たちの「最後の審判」であり、彼らの誤りと完全な罪深さをあからさまに示すものです。その過程で、「すべての口がふさがれ」(すなわち、どんな弁明も破られます:ローマ 3 章 19 節; 詩篇 107 篇 42 節; ミカ 7 章 16 節参照)、最終的に、すべての膝はかがみ、すべての舌が、神の御子であり私たちの主イエス・キリストの賜物である神の恵みと神の栄光を讃えることになります(ローマ 14 章 11 節; ペリピ 2 章 10-11 節)。

II. 人間の創造

悪魔とその従者たちの反抗的な離反に対して、神が対処して下さったおかげで私たちが創造されたのですが、私たちは常に神のご計画の中にあり、神の愛の中にあります。神は天使を創造する義務はありませんでした。また、人類を創造する義務もありませんでした。神は私たちのために御子に死を遂げさせる必要もありませんでした。神は、私たちにとって理解しがたいあの恐ろしい代償を払う必要はなかったのです。それでも、神は私たちを創造されることで、御自身を私たちと共有して下さいました。神は、私たちを創られるにあたり、私たちを祝福して下さいました。その祝福は、まだ私たちに向かって流れ始めたばかりです。私たちを創造し、御子の犠牲によって私たちを救い、私たちを家族の一員とされ、私たちを御自身のもとに引き寄せられ、最終的には私たちと永遠に共に住んで下さること、これらが、愛そのものである神のみわざです。そして私たちは神を父と呼ぶことができる本当の祝福が与えられているのです。

1. 神のかたちと似姿：創世記第1章によると、神は天地回復の第六日目に男と女を創造されました。天が回復し、地が再構築され、満たされ、すべての条件が揃い、すべてが驚くほど整ったとき、神は最初の両親であるアダムとエバに命を与え、彼らを形造られ、完全な場所に置かれました：

神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に(したがって<←欽定訳>)造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを**支配するように**しよう。」

神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。(創世記1章 26-27 節-新改訳IV)

創世記1章 26 節が示しているように、人間が創造された明確な目的は、新しく再建された地球(およびその生物)を支配し、監督することです。この目的は、創世記2章のアダムの創造についてのより詳細な説明の箇所、いくつかの点が再び強調されています。

…また土を耕す人もなかったからである。(創世記2章 5 節後半)

主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。(創世記2章 15 節)

さて、このシリーズの第1部で見たように、サタンは原初エデンの地球の最初の管理者であり、まだ汚されていない原始地球の聖なる山にある神の御座を守る「翼で覆うケルブ<エゼキエル 28 章 16 節-新共同訳>」という名誉ある地位に就いていました。サタンが天使たちを率いて全能の主に反抗して一時的に支配したのは、この原始地球でした。新しく回復された地球に、人間が置かれることになるのですが、サタンが拒否した使命が、つまりサタン(とその従者)が放棄してしまった役割である、神の創造物を忠実かつ従順に監督するということが人間(とその子孫)に課せられたことは、明確です。これまで見てきたように、天使と人間はいくつかの重要な点で全く異なっていますが(特に、天使は寿命や知識において勝っており、肉体を持たないことが特徴です)、決定的な類似点があります。両者とも、創造主のかたちと似姿を映し出す霊性を持っていて、両者とも、知的で感覚的、道徳的責任を持ち、責任のある立場に置かれることができます。

しかし、人間も天使も、それぞれのケースで最も重要な比較すべき点は、忠実に奉仕することを意識的に選択する能力であり、これこそ必須なことです。天使にとっては、神に忠誠を誓い続けるか、脱落して悪魔のもとに行くかという具体的なテストがあり、アダムとエバにとっては、善悪を知る木がテストとなりました(創世記 2 章 16-17 節)。どちらにもテストがあり、それに対応する霊的選択能力がありました。神は、神に仕えるために、罪を犯したり反抗することができない無数の生き物を創造することでもできたであろうことは、議論の余地はありません。しかし、神はその代わりに、自分の自由意志で神を選び、神を愛し、神に仕え、神を喜んで礼拝する者を望まれます(ヨハネの福音書 4 章 23 節)。サタンとその追従者に代わる適切な存在となるために、人類は二つの重要な点で天使と本質的に同じ霊的性質を持つ必要がありました：まず、1) 責任ある選択をする能力と、それをするための精神的・感情的資質、そして、2) 個性(他の全てから独立した独自の人格)です。天使と同様に、人間も神が定めた制限の範囲内で権威を行使し、それに応えることができる生き物であり、また天使と同様に、私たち一人ひとりがこれらの非常に重要な選択を自分で行わなければなりません。これらの二つの重要な霊的性質(すなわち、神を選択する能力と、そうする個人の責任)は、創世記 1 章 26-27 節に「神のかたちと似姿」として記されています：³

神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿にくしたがって<←欽定訳>)造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。(創世記1章 26-27 節-新改訳IV)

「われわれのかたちとして、われわれの似姿にくしたがって」という記述の目的は、人間と神との間の類似性を示すことにあり、ほとんど誰もが認めています。もちろん、無限の神と有限の人間を比較することは難しいので、そのような類推は問題となりますが、神は意識してこの言葉をモーセに与えて筆記させたと、信仰を持つ私たちは理解しています。「かたちと似姿」を正しく理解すると、実際、この新しい被造物が創造主に似る方法について、素晴らしく正確な説明を与えてくれます。

³ J.E.ハートリーは、Theological Wordbook of the Old Testament, R.L. Harris, G.L. Archer, B.K. Waltke edd. (Chicago 1980) v.2 p.768 で、ツェレムとデムートは、人間が被造物を支配していることで直ちに**説明される**と指摘している。

「かたちと似姿」についてまず理解すべきことは、神と人との間の類似点は、完全に霊的なものであるということです。そして、何千年もの間、複数の見当違いをしている神学者が、アダムの肉体的な形状を「かたちと似姿」の意味ととれると、何とか当てはめようとしてきたのは事実ですが、宇宙を創造された神は完全に霊的な存在であると信じるクリスチャンとしては、必然的にそのような空想的な考えを真っ向から否定しなければなりません。⁴ 第二に、この点についてはかなり議論がありますが、神の「かたち」と「似姿」は、どちらも霊的なものですが、同一ではないということです。「かたちのみ」派の支持者は、不当な論拠を使って、「かたちと似姿は互いに説明し合っている」と言うような趣旨の主張をするのをよく耳にします。しかし、このような主張は、次に続く「われわれの似姿に」を本質的に説明する際に、行き詰ってしまいます。神の言葉には無駄がなく、意味あって語られていると信じる私たちの立場からすると、「われわれの似姿に」という言葉は、さらに必要な情報を提供していると受け止めるのが普通です。特に、「かたち」と「似姿」という二つの言葉が、全く異なる意味を持つヘブル語の前置詞によって導入されていることを考えると、そのことがよく分かります。

実際、「われわれのかたちに」と「われわれの似姿に」という二つのフレーズは、どちらも神と人間の間で類似する霊的な側面ですが、二つの非常に異なる領域を表しています。教会史を通して、学者たちはこの問題に取り組んできました。(解決策そのものではないにしても) 解決策に近づけたのは、ナイッサのグレゴリーやオリゲン、その学派の人々で、一般的な原則(かたち)と個々の適用(似姿)を区別していました。⁵ 現代の釈義学者たちは、この議論を聖書倫理学から(本来はそうあるべき)聖書心理学に戻そうとしました。かたちと似姿の中に、(種を越えた全体の)自己意識と個人の人格の二つの要素があることに気づいたJ.レイドローの洞察に満ちた分析は、非常に的を射ています。⁶ しかし、レイドローはかたちと似姿の違ったものをひとまとめに捉えました。「かたち」を(三位一体の三者に共通する神の本質に似ている)人類共通の霊的本質とし、「似姿」を(三位一体の三者の異なる個性に似ている)人間各自が持つそれぞれ異なる個性であると最初に捉えたのはR.B.ティームの大きな功績によります。⁷

⁴ F. Delitzsch, A System of Biblical Psychology (Erlangen 1855) 78-87 は、教父たちが一般に、かたちと似姿を霊的な意味で捉えていたことを指摘している。

⁵ トレンチの議論は『新約聖書の同義語』(London 1880) 49-53 を参照されたい。

⁶ The Biblical Doctrine of Man (Edinburgh 1895) 160-175.

⁷ R.B. Thieme Jr., Adam's Rib (Houston 1973) 5, et alibi. また、レイドロー(前掲書 n.6)は、これらのフレーズにおいて、三位一体が別個の、人間の人格のモデルであると主張していた、170.

この解釈が、「似姿」と「かたち」を区別するものについて正確な真理を突いていることは、この二つの用語が導入されている二つのヘブル語の前置詞によって、より明確になります。人間は神のかたち**として**、しかし神の似姿**に従って**＜欽定訳では「according to」＞造られたと言われています。多くの人が支持しているように(実際、この点はヘブル語の初歩的な知識の人にも明らかですが)、そもそも、上記で「～として」と訳されている前置詞 be(ב)は、上記で「～にしたがって」と訳されている前置詞 ce(צ)よりもはるかに密接な関係を表しています。⁸ この使い分けは、私たちが主張してきた区別とうまく対応しています。人間の霊性は、神の似姿というよりも神のかたちをうまく表すものです。私たち人間が共有する本質を考えると、神の本質が与えるものとうまく重なるもので、人間があらゆる点で堕天使に十分取って代わるようになるための重要な特徴です：天使がそうであるように、私たちは権威が与えられています。その権威は神の統治に対応しています。また私たちは、その権威を適切に用いるための霊的な側面と能力が与えられていますが、そうした側面は神の無限の本質に非常に有限な形で対応しています。しかし、私たち人間の個性という点では、三位一体の三者の間にある対応関係と似てはいますが、どちらかというと緩いものです。三位一体のように、人類はそれぞれ同一の霊的本質を持つ多数から構成されていますが、三位一体のように、父と子と聖霊のように「一つ」になるほど、本質的に密接に結びついているわけではありません。したがって、「かたち」と「似姿」それぞれにおける神に対する近さの違いは、単に量の問題(すなわち、非常に多くの人間、三位一体の三者のみ)というだけではなく、二つの別々のレベルでの質的なものです。それは、1)三位一体の性格と人間の性格との間の明らかな格差であり、2)霊的に統一された三位一体と、同じような本質を持っても、三位一体が共有しているようには同じ本質を共有していない複数の人間との間の質的な違いでもあります。⁹ 人間は神に匹敵する存在ではないし、これからも匹敵することはないという明白な点の他に、別々の人間の個々の「本質」の間に不一致があることには、もう一つの正当な理由があります。私たちは皆、神に従い、神に仕えるようにという神の呼びかけに答えるかどうか、個々に選択しなければならず、神を拒絶することを選んだ者は、最終的に神からも私たちからも分離されることになります(人間の本質におけるこうした分離は、神の本質の場合には起こり得ませんし、将来もそうです)。

-

⁸ 例えば、Theological Wordbook of the Old Testament, R.L. Harris, G.L. Archer, B.K. Waltke edd. (Chicago 1980) v.1, 438 を参照。(Chicago 1980) v.1, 438.

⁹ 第1部 聖書の基礎知識 をご覧ください。神学 「神の研究」第II部「神の位格：三位一体」。

創世記 1 章 26-27 節で「かたち」と訳されているヘブル語の単語はツェレム tselem (צלם)で、同じく「かたち」を意味するギリシャ語の単語はエイコン(εἰκών)(七十人訳と新約聖書で使われています)です。ツェレムもエイコンも、人間が神の本質を霊的に映し出すことを意味します。ツェレム tselem は ツェル tsel (צל) (「影」)に由来するという説もありますが(いずれにしても、ヘブル語の読者にはこの言葉のつながりが感じられるでしょう)、聖書においてツェレムはかなり具体的な意味で「かたち」を意味しています。この言葉は異教の偶像のためにしばしば使われるもので、結局のところ異教の神の複製を意味するものです。¹⁰

この類推(霊的に考えてみた際)は、神のかたちは、神の主権を非常に明確に反映するものであると思われます。人間は(楽園において)神のために行動し、ある時には神としても行動します。神は私たちが神に仕えるために創られたのですから、私たちが正しく行動しているときは、まさに神の代わりに行動しているのです。

私たちはエル(אל)、つまり「小さな g の god」であり、「大文字の G の頭文字の God」神(エロヒム'elohiym: אלהים)のかたちです(ただし、ヘブル語では、前者は単数形の名詞であるのに対し、後者は神ご自身に使われる「威厳のある」複数形の名詞となっています)。

わたしは言う、「あなたがたは神だ、あなたがたは皆いと高き者の子だ。(詩篇 82 篇 6 節)

イエスは彼らに答えられた、「あなたがたの律法に、『わたしは言う、あなたがたは神々である』と書いてあるではないか。(ヨハネ 10 章 34 節)

それゆえ、「力ある者」(すなわち「神々」と呼ばれる被造物のこの例えが、人間と同様に天使にも適用されているのは、完全に理にかなっています。なぜならば、神の委任によって、彼らもまた神(力ある者)の権威を共有しているからです。¹¹

¹⁰ 例えば、列王記下 11:18; エゼキエル 7:20; 黙示録 13:14-。この点は、ヘブル 10:1 では、eikon エイコン(かなり正確なものとして: 来るべき良い現実)が律法の「影」と明確に区別されていることから、はっきりと分かります。

¹¹ また、天使は人間と同じように「神の子」と呼ばれている(創世記 6:1-4、ヨブ記 1:6、2:1、38:7、詩篇 29:1、89:6-7)。

主よ、わたしは心をつくしてあなたに感謝し、**もろもろの神**＜神々-欽定訳:新改訳IVでは「御使たち」＞の前であなたをほめ歌います。(詩篇 138 篇 1 節)

すべて刻んだ像を拝む者、むなしい偶像をもってみずから誇る者ははずかしめをうける。**もろもろの神**＜新改訳IV「神々」＞は主のみ前にひれ伏す。(詩篇 97 篇 7 節)

人とは何ものなのでしょう。あなたが心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。

あなたは人を**御使い**＜天使達-欽定訳; 直訳「**神々**」＞**よりわずかに欠けがあるものとし**これに栄光と誉れの冠をかぶらせてくださいました。

あなたの御手のわざを**人に治めさせ**万物を彼の足の下に置かれました。

羊も牛もすべてまた野の獣も空の鳥、海の魚、海路を通うものも。(詩篇 8 篇 4-8 節 新改訳IV)

詩篇 8 篇 4-8 節は、この地上における神(God)の代表者である人間と天使の間のつながりを示しているので、私たちの研究に特に適しています。天使たちは「力ある者」と表現され、小さな「g」のついた「神々 (gods)」とされていますが、人間は、神から委ねられた主権を最初に享受したこれらの完全に霊的な被造物よりも「少し低く」されていると言われています。それにもかかわらず、(イザヤ 14 章 12-20 節やエゼキエル 28 章 12-19 節などの他の聖句からわかるように、**地球の元々の天使の主権者であるサタンに代わって**)地球と神が地球上に創造したすべてのものの**主権者とされるのは人間**なのです。¹²

さて、人類が(こぞって)、アダムにあつて墮落したことは事実です(ローマ 5 章 12-21 節、コリント第一 15 章 21-22 節)。また、アダムの墮落の結果、サタンが現在の「世の支配者」であることも事実です(ルカ 4 章 6 節; ヨハネ 12 章 31 節; 14 章 30 節; 16 章 11 節; ヨハネ第一 5 章 19 節)。

しかし、悪魔が奪った主権は、これまでも、そしてこれからも、神に対処されないままにいるわけではありません(創世記 3 章 15 節; 黙示録 20 章 10 節)。

¹² このシリーズの第 1 部&第 2 部をご覧ください。サタンの反乱と墮落」「創世記のギャップ」をそれぞれご覧ください。

神は人の子らを使って、悪魔の一時的な権威に対して対処してこられました。この権威は、神の子が十字架上で勝利したことによって、地位的(原理的)に無効にされ(イザヤ 42 章 3-4 節; マタイ 12 章 20 節; コリント第一 15 章 54-57 節; コロサイ 2 章 15 節; ヨハネ第一 5 章 3-5 節)、神の再臨の際には、経験的(実地的)に粉碎されることになります(詩篇 110 篇 1 節; 黙示録 19 章 11-21 節)。なぜなら、キリストこそがまさに御父の**真のかたち**だからです(ヘブル 1 章 3 節)。そして、御父から委ねられた完全で完璧な主権をもって地上を支配するのはキリストであり(イザヤ 9 章 6-7 節)、それは御父の敵がすべて打ち砕かれ、御国が御父に引き渡されることができるようになるまでです(コリント第一 15 章 24-28 節)。

その後、私たちは、「義の住む」(ペテロ第二 3 章 13 節)新しい天と地を、御父がゆるぎなく治めるのを目にすることになります(黙示録 21 章 8 節; 22 章 3 節)。

詩篇 8 篇では、人が真の神のしもべとして適切に行動し、神の御心に従って神の創造物の中で奉仕している様子が描かれています。ですから、この箇所が最後のアダムである私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストに究極の預言的成就を見出すことは、全く驚くべきことではありません：

いったい、神は、わたしたちがここで語っているきたるべき世界を、御使たちに服従させることは、なさらなかった(これが私たちの今扱っているテーマです)。聖書はある箇所で、こうあかししている、「人間が何者だから、これを御心に留められるのだろうか。人の子が何者だから、これをかえりみられるのだろうか。あなたは、しばらくの間、彼を御使たちよりも低い者となし、栄光とほまれとを冠として彼に与え、万物をその足の下に服従させて下さった」。「万物を彼に服従させて下さった」という以上、服従しないものは、何ひとつ残されていないはずである。しかし、今もなお万物が彼に服従している事実を、わたしたちは見ていない。ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味われるためであった。(ヘブル 2 章 5-9 節)

上記の聖句はすべて、今まで述べた主張に言及していて、人間の中の神のかたちの主要な点は、**権威を行使し、またそれに応答する能力である**ということ、つまり神が任せて置かれた場所で神に代わって主権的に行動し、その責任を神に対して負うこ

とです。¹³ この重要な霊的特性は、他の明白な精神的、霊的な側面や(自己意識、精神性、良心などの)資質を要します。しかし、神の主権は神の完全な性格からくる協調的な特質であるので、¹⁴ 裁き、統治する能力、そして(神から任せられたことを、私たちがどうやったかに関して)道徳的に責任を負う能力は、神の本質と人の本質、原型としての神とそのかたちとしての人を比べて見る際の重要な性質です。

神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に(したがって<欽定訳>)造ろう。...**支配するように**しよう。」(創世記 1 章 26 節前半・新改訳IV)

創世記 1 章 26 節で「似姿」と訳されているヘブル語の単語は「デムート」(tvmd)であり、また(七十人訳および新約聖書で使用されている)「似姿」を意味するギリシャ語の単語は「ホモイオマ ‘omoiwma,」(homoioima)または「ホモイオシス omoiwsiV」(homoiosis)です。デムスもホモイオマ／ホモイオシスも、私たちが神の本質を共通に映し出すことではなく、私たちが神を求め、従い、仕えるという個々の責任を負っているという事実を指しています。¹⁵「似姿」は、ユニークでそれぞれの個性を持つ人格が多数によってなっていることと関連があります。この点では、(先述の理由により、三位一体の本質であるかたちに比べると程度はそれほどではないですが)、三位一体の三者(位格)<の間の一体であること>と<人が他の多数者との間にできるつながり>とは重なるところがあると推測できます。創世記 1 章 26 節の代名詞が複数形(「われわれ」、「われわれのかたち」)であることから、この箇所から三位一体を除外することは、まず難しいでしょう。¹⁶ 私たちは、全体的な本質において神のかたちを共有していますが、神の似姿は、三位一体が「われわれ」であるように、人類が**多くの異なる者達**から構成されており、それぞれが神のかたちを共有し、(また、神を求め、従い、仕えると

¹³ チャールズ・ホッジ『組織神学』(プリンストン 1871 年)第 2 巻、99 は、人間について「彼は霊であり、知的で自発的なエージェントであり、そのようなものとして彼は当然に普遍的な支配権を与えられている」と述べている。

¹⁴ 第 1 部「聖書の基礎知識：神学：神について」の I.B.4 項「神は主権者である」をご覧ください。

¹⁵ 例えば、ヤコブ 3 章 9 節では、人類一般(つまり一般的な複数)を視野に入れているため、「神に似たもの」にホモイオシスが使われています。また、創世記 1 章 27 節では、「神のかたちにアダムを創造した」だけで、「神のかたちに人を創造した」が繰り返されない理由も、この時にアダムだけが創造され、全人類が創造されたわけではないからです。

¹⁶ レイドローがわかりやすく指摘しています 1895 (n.6. supra) 168ー。

いう、本質に伴う**個々人の**責任を共有している)という事実に関連しています。ある人が主張したように、デムート(demuth 似姿)がダム(dam「血」)に由来するという可能性もありますが(いずれにしても、ヘブル語の読者はこの言葉の関連性を感じたでしょうし、アダム(Adam)とアダマ(Adamah)の「地/土」とも関連していますが)、聖書の中では、デムートは「似ている」という意味であり、この重要な言葉や概念と取り立てて関連づけさせるものではありません。また、神の似姿を類推するポイントは、神の三つの位格であり、この比較ポイントはあらゆる点で完全に霊的なものであることを覚えておく必要があります。

これはアダムの歴史の記録である。神は、人を創造したとき(直訳-日)、神の似姿として人(人類)を造り、男と女に彼らを創造された。彼らが創造された日に、神は彼らを祝福して、彼らの名を「人」と呼ばれた。アダムは百三十年生きて、**彼の似姿として、彼のかたちに(したがって**<←欽定訳,ABP 訳>)男の子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた。(創世記5章 1-3 節 新改訳IV)

ここでいう「日」あるいは期間は、アダムとエバを創造した最初の日だけではなく、「アダムの歴史の記録」という言葉が示すように、それ以降のすべての時間を含みます。したがって、原初の創造とその後の人類の子孫(すなわち、すべての人間が神によって生命を与えられた「人間の**世代**」)のことを言っています。従って、創世記5章1節の「神の似姿として人(人類)を造り」という表現は、創世記1章26節の「われわれのかたちとして、われわれの似姿にしたがって」という二重の表現を意図的に合成したものと説明できます。この表現は、モーセが最初の人間であるアダムよりも多くの人間を視野に入れて使用したことに違いありません(そのため、焦点は自然と人類の多様性に移りますが、各個人が持つ本質的な自由意志を思い起こさせるために「として」が残されています; 創世記9章6節も再び、一個人が扱われている場合なので、「神の**かたち**として」となっています)。そして、この3節の場合も、かたちと似姿に使われている前置詞(be と ce、それぞれ「～として」と「～にしたがって」)が逆転していることは、解釈の決め手にはなりませんが、先ほど述べた点を確認する形になっています。先に引用した創世記1章26-27節と創世記5章3節の決定的な違いは、二つの文章の**主語**が全く異なることです。創世記1章26-27節では主語が**神**であり、創世記5章3節では主語が**アダム**です。明らかに、人間の類似に基づく比較は、神の類似に基づく比較とは全く異なるものにならざるを得ないのです。この事実は、創世記5章3節の「彼の似姿として」と「彼のかたちに**従って**」という逆転現象を説明しています。人と人との間では、「似姿」、つまり個々人は、人間として皆、全く等しい存在です(創世記1章26節で人と神とが比較されているのと対照的です)。

なぜなら、神の本質と(原理的に)似たような人間の本質を比較するのではなく、一人の(肉体と精神を持つ)人間全体ともう一人の完全な人間を比較するからです。アダムとセツは種という観点では似ていますが、お互い異なっていたということは明白です(心、感情、適性など、人格において異なっていたということは言うまでもありません)。創世記 1 章 26 節で示されたパターンに基づいて、「人対人」におけるかたちと似姿の違いと「人対神」におけるかたちと似姿の違いの区別を明確にするためには、「として」と「に従って」を逆にするしかないのです。

私たちは、人間が神の栄光のために創造されたことをすでに見てきました(上記 I.3 参照)。このような神の栄光は、主(おも)に神が私たちのためにして下さること(特に、私たちに代わって御子イエス・キリストが犠牲になること)によって達成されていますが、私たちもまた、この地上で自分の意志によって役割を果たします。私たちのかたちと神の似姿、つまり自己決定とそれぞれが分離して別個であること、神のために選択する能力とその個人的責任、限られた主権と(各自程度の差はあっても)種族全体への共通の貢献、これらは霊の側面であり、これらがなければ私たちがこの栄光の過程(別の言い方をすれば人類の歴史)に参加することは不可能です。

簡単に言えば、神は私たちの従順さ、つまり**神の**主権的な権威に対する私たちの応答によって栄光を得るのです。私たちの意志は、自分の人生の進路を選ぶことによって結果を刈り取ることになるという意味で、本当は「自由」ではありません。私たちの選択肢はただ一つ、神様に従うことです。もし私たちが従えば、神は私たちの従順さによって栄光を受けます。もし従わなければ、私たちは結果に苦しみます(そして、神は私たちに愛で対処することを望んでおられるにもかかわらず、私たちに正義で対処されることによって、いくらかの栄光を享受されるのです)。

つまり、私たちには「自由意志」という言葉はありません。私たちは、神の御心に従うことを選択するか、さもなければ、現在の「この世の支配者」に従うことを余儀なくされます(ガラテヤ 5 章 16-17 節)。それは神であるがゆえに持つておられる権威であり、その権威は私たちのために支払われた、ひとり子の死による代価によって、この上なく明白にされていますが、それでも、悪魔によって篡奪されてしまったこの世の権威のために、神を拒絶するかという選択肢です(第一ヨハネ 2 章 15-17 節)。

もし私たちが主を求め、主に仕え、主に従うならば、私たちの人生、霊的な賜物、主が割り当てた任務から生み出される実において、神によって、かつてアダムに授けられ委譲された主権に与る者となることができます。しかし、私たちの仕事は、完璧なエデンを治めるのではなく、地球という戦場の、主によってあてがわれている特定の領域において、それぞれの競技によって神の栄光を現すことです。

どのような霊的賜物であれ、どのようなミニストリーであれ、神が私たちに与えたどのような働きであれ、それらはアダムがエデンを治めていた時と同じく、神が委任して下さった私たちの主権の領域です。私たちは、この篡奪されてしまっている領域においては、神の御心のままに、神の力で、神の栄光のために奉仕して、私たちの心に神の力が働いていることを示すことをしています。

かつては悪魔に任せられていたけれども(しかし拒絶され)、次にアダムに任せられた(しかし奪われてしまった)その場所で、今では、アダムの墮落した種の一部が神のために**選択する**機会を持っているのです—それは神がまず私たちを選ばれたからですが—悪魔の権威を拒み、神の主権を受け入れて、イエス・キリストを通して神に栄光を与えるという選択です。

このようにサタンと墮落天使達にとって代わる者として、人は神のかたちと似姿などを帯びる必要があったのです。

つまり、(反抗的な篡奪者に代わって:エペソ2章2節)神の忠実な執事として行動することによって神の栄光を反映するため、また(神から委任された)**権威を行使し**、(罪による墮落後においてもキリストを信じることによって)神の権威に**応答する**能力を個人単位で備えている必要があったのです。十字架での勝利以来、キリストは今や私たちの直接の権威であり、私たちの「頭」であり、天と地のすべての力と権威はキリストに与えられています(マタイ28章18節、コロサイ2章10節、さらに参照箇所:マタイ9章6節、ヨハネ5章27節、17章2節、エペソ2章20-22節)。

頭から髪の毛を垂らして祈ったり預言したりする者はその頭(つまりキリスト:3節参照)を辱める者である。(喪のしるしとして髪を乱して)祈をしたり預言をしたりする時、かしらにおおいをかけない(髪の毛を垂らした状態の)女は、そのかしら(すなわち、夫:3節参照)をはずかしめる者である。それは、髪をそったのとまったく同じ[く恥ずかしい事]だからである。もし女が[整えたり、ピン止めしたり、編み込んだりなどして]おおいをかけないなら、髪を切ってしまうがよい。髪を切ったりそったりするのが、女にとって恥ずべきことであるなら(実際にそうです)、おおいをかけるべきである。男は、神の**かたちであり栄光**であるから、かしらに物をかぶるべきではない。女は、また男の光栄である。(第一コリント11章5-7節)

私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつ、栄光から栄光へと、主と**同じかたちに**(もっとキリストのように)姿を変えられていきます。(第二コリント3章18節 新改訳IV)

上記の二つの文章で「かたち」という言葉が使われていることを比較すると、見かけ上の矛盾があることがわかります(見かけだけです)。第一コリント 11 章 7 節では、人はまだかたちを帯びていますが、第二コリント 3 章 18 節では、私たちクリスチャンが「同じかたち」に変えられていく過程にあるという事実は、私たちが現在、神のかたちを持っていない(あるいは、少なくとも何らかの形で損なわれているので、修復の必要な状態である)ことを示唆しているように、多くの人に思われています。¹⁷

このような神のかたちの「損傷」や「消去」という捉え方の根本的な原因として、アダムの墮落が挙げられています。しかし、このような理論の根底には、(よく似姿と区別されないで)かたちが少なくとも部分的にはアダムの体に関係していると捉えられているからです。前に取り上げたように、神のかたちも似姿も両方とも完全に霊的なものです。¹⁸

墮落以来、私たちの体は罪によって汚され、染まるようになりましたが、私たちの霊は創造の六日目に神から与えられた二つの重要な要素を保持しています。1) 権威を行使し、それに応える能力(「かたち」と、2) 自分自身の人格に対する責任(「似姿」)です。第一コリント 11 章 7 節には、人間は依然として神の「かたちと栄光」(神から委ねられた権威を適切に行使し応答する)であると明記されています。また、よく考えてみると、第二コリント 3 章 18 節は全く違うことを言っていることがわかります。この箇所では、私たちクリスチャンが見習うように命じられている「同じかたち」とは、**キリストのかたち**です(エペソ 4 章 24 節、コロサイ 3 章 10 節参照)。キリストは御父の**正確な**かたちであり(ヘブル 1 章 3 節)、御父の御心に完全に従った私たちの究極の手本です(例えば、マタイ 16 章 24 節、第一コリ 11 章 1 節)。

人間としての共通の遺産である「かたちと似姿」は霊的なものですが、私たちは罪の中で生まれました(ローマ 7 章 18 節と 24 節)。私たちは人間として、神を求め、神に従い、神に仕えることができる可能性を持っています。しかし、そのためには、まずイエス・キリストを信じ、イエス・キリストに従うという神の権威に対する従順と応答が必要です。このようにして初めて、私たちは神の「かたちと似姿」の可能性を満たし、神が私た

¹⁷ このテーマに関する様々な見解の概要については、L. Berkhof, *Systematic Theology* (Grand Rapids 1949) 202-210 を参照されたい。

¹⁸ 後述の II.3 項も参照。

ちを創造し、その後、イエス・キリストにおいて私たちを再創造された目的である神への栄光をもたらすことができるのです(ヨハネの福音書 3 章 3 節)。¹⁹

-

2. アダムの創造: 創世記 1 章 26-27 節の人間(アダムとエバ)の創造の概要は、一般的な原則を扱っています。1) 私たちは皆、神のかたちに造られている(すなわち、私たちは同一のタイプの霊的本質を共有しており、その最も顕著な特徴は、イエス・キリストのために生き、働き、地上において神に従順で忠実な執事となることを目的として、権威を理解し、行使し、それに応答する能力です) 2) 私たちは皆、神の似姿に造られている(すなわち、私たちは皆、神の権威に応答する個々の責任を持つ固有の人格です)。しかし、創世記 2 章 7 節には、神が最初の人間であるアダムを創造した実際の出来事について、より詳細な記述があります:²⁰

神である主は、その大地のちりで人(すなわちアダムの体)を形造り、その鼻にいのちの息(すなわち彼の霊)を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。(創世記 2 章 7 節 新改訳IV)

創世記 1 章 26-27 節に加えて、アダムの創造に関するこの記述があることは重要です。創世記 1 章 26-27 節は人間の霊について述べていますが、この聖句はアダムの肉体の創造と、神がその肉体に人間の霊を吹き込んで生かされたことについて述べています。

アダムの創造の主体は「主なる神」(yhvh `elohiym: יהוה אלהים)です。三位一体の三位とも「主」と呼ばれていますが、父の代表であり創造の代理人であるのは、私たちの主、イエス・キリストであり、まさに悪魔との戦いを指揮し、最終的にはサタンに代わって世界の支配者となるように選ばれた方です(ヨハネ 1 章 3 節、コロサイ 1 章 16 節、ヘブル 1 章 2 節)。²¹

¹⁹ 神を求める人間の共通の可能性は、例えば、伝道者の書 3 章 11 節, 詩篇 19 篇 1-4 節, 使徒行伝 17 章 26-27 節, ローマ 1 章 9-20 節, 2 章 14-16 節 に示されています。

²⁰ 創世記 2 章 4 節は 7 日間の再創造の要約で、創世記 2 章 5 節からこのより詳細な説明が始まります (NIV などに反しています)。このシリーズの第 2 部、「創世記のギャップ」を参照してください。

²¹ 「聖書の基本」の第 1 部「神学：神について」の第 II 部 C 「旧約聖書における三位一体」、本シリーズの第 2 部「創世記のギャップ」第 III 節「創造と再創造」も参照ください。

その時は、神人として肉体と精神を持ち、衰えることのない神と永遠に結ばれた真の人間となるのです。サタンとその追隨者にとって代わるべき種の最初のものであるアダムのために、神が肉体を創造されたことは、サタンの仲間らの肉体の所有に対する渴望を考えれば、それら極悪非道の集団に激震の衝撃を与えたに違いありません。

22

実際、この箇所のすべてがアダムの肉体の本当の意味での物質性を強調しています。1) アダムは塵(またはやわらかい土)から創造され、その物質的な起源を強調しています。2) アダムは「形造られた」(ヘブライ語の動詞 *yatsar*, יָצַר)とあり、これはしばしば陶器師のなす仕事に使われる言葉で、形造られる過程が強調されています(例えば、イザヤ 29 章 16 節)。3) アダムという名前(アダム 'adham, אָדָם)は、地面を意味する(アダマ 'adhamah, אֲדָמָה)と密接に関係しており、この人が造られた大地と密接につながっていることを強調しています。

重要なことは、物質的、可塑(かそ)的で、大地と結びついた身体の創造は、それだけでは命に結びつかないということです。命は、主なる神が、新しく形成された身体に「生きた霊」を入れて初めて発生します。さらに、神が最初の人間に人間の霊(「命の息」、すなわち「命を与える息」)を吹き込んだ結果として初めて、アダムは「生きた人間」になるのです。天使が観察し、アダムの子孫のために記録されたこの過程は、1) アダムが霊的な存在であると同時に物質的な存在であること、2) 人間の霊も肉体も、他方がなければ存在しないというものではないことをはっきりと示しています。

霊魂のないからだが生きたものであると同様に、行いのない信仰も死んだものなのである。(ヤコブ 2 章 26 節)

わたしたちの住んでいる地上の幕屋(すなわち、私たちの肉体)がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている。そして、天から賜われるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみもだえている。それを着たなら、**裸のままではいない**ことになる(つまり、私たちの霊は、死によって暫定的な体を受けるので、「体のない」状態にはなりません;詩篇 141 篇 8 節参照)。(第二コリント 5 章 1-3 節)

3. 人間の霊: 私たちすべては、アダムの創造のパターンに、従っています。言うまでもなく、私たちの体は、神が直接創造されたものではなく、自然な子孫繁栄による間

²² 本シリーズ「サタンの反乱と墮落」の第 1 部 IV, 3, b 参照。

接的な形成によるものですが、最初に体が造られ、後に主によって命を与える霊が入れるという順序は、最初の人間の創造の時と同じです。

この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。また、何か不足でもしておるかのよう、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に**命と息と**万物とを**与え**、(使徒行伝 17 章 24-25 節)

上記の箇所は、アダムの創造を重ねます。使徒行伝 17 章 24-25 節でパウロは、神が人間を造ったときの創世記 2 章 7 節同様の三つの要素を列挙しています。

- ・1) いのち (生きている人一つまり、生まれるときに人の霊を神がその体に植え込まれたことで、肉体と霊が融合して生じたいのち)。
- ・2) 息 (= 人の霊)。
- ・3) その他のすべてのもの (私たちの身体と、それをこの世で維持するために必要なもの)。

今回の議論で最も重要なことは、創世記 2 章 7 節と同じように、使徒行伝 17 章 24-25 節で、「命」は神からの贈り物である「息」(すなわち人間の霊)の結果であると言っていることです。神が人間の霊を体に入れて初めて命が発生するのであり、この霊の注入がなければ命は存在しません。他の聖句からも、人の命は神が人の霊を与えた結果であり、それがなければ肉体は死んでしまうことがわかります：

1) 人間の霊は神によって与えられる：

(死ねば)ちり(すなわち体)は、もとのように土に帰り、霊はこれを**授けた神**に帰る。(伝道の書 12 章 7 節)

天を創造してこれをのべ、地とそれに生ずるものをひらき、その上の民に**息を与え**、その中を歩む者に**霊**を与えられる主なる神はこう言われる、(イザヤ 42 章 5 節)

2) 人間の霊が肉体に入ることで、命が生まれる：

これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは**お前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。**わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、**霊を吹き込む。すると、お前た**

ちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」(エゼキエル 37 章 5-6 節-新共同訳 <他の訳では「霊」が「息」>)

イエスは[死んだ]娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きなさい」。するとその**霊がもどって**きて、娘は即座に立ち上がった。…(ルカ 8 章 54-55 節前半)

三日半の後、**いのちの息**<LITV, YLT などの英訳は「spirit-**霊**」>が、神から出て彼らの中に[獣に殺された二人の証人の体に]はいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常な恐怖に襲われた。(黙示録 11 章 11 節)

3)人間の霊が体から出ると死に至る:

もし、神がご自分だけに心を留め、**その霊と息**をご自分に集められたら、**すべての肉なるものはともに息絶え**、人は土のちりに帰る。(ヨブ 34 章 14-15 節 新改訳IV)

しかし、イエスは再び大声で叫んで**霊を渡された**。(マタイの福音書 27 章 50 節-新改訳IV)

こうして、彼らがステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、「主イエスよ、**わたしの霊をお受け下さい**」。(使徒行伝 7 章 59 節)

ヘブル語で人間の霊を表す言葉は、「風」を意味するルアハ(רוח)と「息」を意味するネシャマ(נשמה)です。ギリシャ語で人間の霊を表す言葉はプネウマ(πνεῦμα)で、風と息の両方に使われます。ヘブル語のルアハとギリシャ語のプネウマに共通する点は、人間の精神に加えて、聖霊や文字通りの風を意味する言葉としても聖書で使われていることです。ここではっきりしているのは、風と息は目に見えない現象ですが、どちらも非常に現実的な現象であるということです。息-風は、非物質的で人の目には見えない類のものあり、それが植えつけられると肉体を活性化させ、生命をもたらすもの、すなわち人間の霊に例えることができます。

a) 人間の霊が私たちが誰であるかということ: 人間の霊は、肉体を動かす単なる生命力ではなく、本質的に「私たちが誰であるか」を表しています。私たちの意志と自己決定、良心、理解力と精神力、意識と自己意識は、肉体から独立しているわけではありませんが、本質的には、私たちという特定の個人的な人間の霊の側面です。以下

は、人間の霊の側面、性質、機能について触れた聖句のリストです。これらの聖句をまとめると、聖書における人間の霊とは何か、すなわち私たちの「内なる人」、本当の「私たち」とは何かについて、鮮明な絵像が見えてきます。以下は＜人の＞霊の領域のリストです：

良心： 人の魂＜欽定訳では「霊」＞は主のともしびであり、人の心の奥を探る。（箴言 20 章 27 節）

思い： いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っているか。（第一コリント 2 章 11 節前半）

知覚： イエスは、彼らが内心このように論じているのを、自分の心ですぐ見ぬいて...（マルコ 2 章 8 節前半）

元気： ..テトスの喜ぶさまを見て、わたしたちはいっそう喜びました。彼の心＜欽定訳では「霊」＞があなたがた一同のお陰で元気づけられたからです。（第二コリント 7 章 13 節 新共同訳）

悟り： しかし人のうちには霊があり、全能者の息が人に悟りを与える。（ヨブ記 32 章 8 節）

意欲： ...（神の御心を行おうとして）霊は燃えていても肉は弱い（つまり実行しようとしにくい）のです。（マタイ 26 章 41 節後半 新改訳Ⅳ）

決心： これらの事があった後、パウロは御霊に感じて、マケドニヤ、アカヤをとおって、エルサレムへ行く決心をした...（使徒行伝 19 章 21 節前半）

知性： 私が御子の福音を宣べ伝えつつ霊をもって仕えている神があかししてくださるのですが、私はあなたがたのことを思わぬ時はなく...（ローマ 1 章 9 節 新改訳Ⅲ）

人格： [私はすでにそう決めていました]。すなわち、あなたがたと、私の霊が、私たちの主イエスの名によって、しかも私たちの主イエスの御力とともに集まり、そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。（第一コリント 5 章 4－5 節 新改訳Ⅳ）

精神： もしわたしが異言をもって祈るなら、わたしの霊は祈るが、[肉の]知性は実を結ばないからである。すると、どうしたらよいのか。わたしは霊で祈ると共に、知

性でも祈ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう。(第一コリント 14 章 14-15 節)

成長: すなわち、あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである[ことを学んできたからである]。(エペソ 4 章 22-24 節)

理解: 御霊みずから、わたしたちの霊と共に<ABP などの英訳では「私たちの霊に対して」>、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる。(ローマ 8 章 16 節)

礼拝: 神は霊であるから、礼拝をする者も、霊(すなわち、人間の霊が聖霊に応答すること)とまこととをもって礼拝すべきである」。(ヨハネ 4 章 24 節)

祝福: 主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように。(ピリピ 4 章 23 節)

私たちが死ぬ時、私たちの肉体は、土に帰りますが、しかし、イエス・キリストを信じる者として、私たちの霊(すなわち、私たち自身)は神のみ前に入り(黙示録 7 章 9 節-参照)、一時的に仮の体を身につけることになり(第二コリント 5 章 3 節[ギリシャ語]、黙示録 6 章 11 節)、復活して彼らの(すなわち、私たちの)新しい永久的で、より優れた「復活の体」²³に入るのを待ちます。このように<私たちの内に>宿っている霊こそが本当の「私たち」であることは、イエス様のされたラザロと金持ちの話からも明らかです(ただし、この話に出てくるイエス様が十字架にかかれる以前の信者は、今は第三の天に移されています: このシリーズの第 1 部参照)。ルカ 16 章 19-31 節では、アブラハム、アブラハムの霊が、一時的にこの復活前の状態をまとっているものの、(労苦と涙がないことを除いては)あらゆる面で生前と同じように見えます。これは、ラザロにも、金持ちにも(今も通過している苦しみを除いて)、当てはまります。体を失っても、私たちが誰であるかという本質的な事実は変わりません。また、神は私たちを霊と体の両方を持つ被造物としてお造りになったので、私たちが「裸」(霊を覆うものがない状態: 第二コリント 5 章 3 節)になることはありませんし、私たちが熱心に願っている永遠の体を受ける日はやって来ます(ローマ 8 章 23 節)。私たちの体は大切ですが(第一コリント 6 章 13 節)、体は私たち自身というよりは、私たちが誰であることを示す道具

²³ この教義の詳細な説明については、Peter #20 を参照。

であり、つまり、神の栄光のために神に仕えるという目的のために、私たちの霊が用いるものなのです(ローマ 6 章 20 節、第二テモテ 2 章 20-21 節参照)。

兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。**あなたがたのからだ**を、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてさげなさい。それが、**あなたがたの**なすべき霊的な礼拝<ichthys 英文では“priestly-service”「祭司の務め」>である。(ローマ 12 章 1 節)

あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、**自分のからだ**をもって、神の栄光をあらわしなさい。(第一コリント 6 章 19-20 節)

あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、「**自分のからだを打ちたたいて**」服従させるのである。そうしないと、ほかの人に[福音を]宣べ伝えておきながら、自分は[皆が求めている賞を受け損なう]失格者になるかも知れない。(第一コリント 9 章 24-27 節)

私たちはみな、善であれ悪であれ、**それぞれ肉体において**した行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。(第二コリント 5 章 10 節 新改訳IV)

そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、**わたしの身によって**キリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。(ピリピ 1 章 20 節 新共同訳)

しかし、アダムの墮落とその結果としての腐敗の後、肉体はしばしば霊(つまり「私たち」)に悪い影響を与えます。つまり、キリストを信じる私たちは、肉体からの(今では)悪しき影響力と聖霊の神聖な影響力の間に挟まれているのです。私たちの霊(=私たち本人)は、父なる神と私たちの主イエス・キリストに仕えるために聖霊に従うのか、

それとも罪深い体の欲望、渴望、情欲に負けてしまうのか、という選択をこの世で迫られているのです。

いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。(ヨハネ 6 章 63 節 新改訳IV)

また、あなたがたの[からだの]肢体を不義の武器として罪にささげてはならない。むしろ、死人の中から生かされた者として、自分自身[のからだ]を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい。(ローマ 6 章 13 節)

わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。(ローマ 7 章 18 節)

それゆえに、兄弟たちよ。わたしたちは、果すべき責任を負っている者であるが、肉に従って生きる責任を肉に対して負っているのではない。なぜなら、もし、肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬ外はないからである。しかし、霊によってからだの働きを殺すなら、あなたがたは生きるであろう。(ローマ 8 章 12—13 節)

あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。(ローマ 13 章 14 節)

わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。なぜなら、肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる。(ガラテヤ 5 章 16—17 節)

b) 人の霊は、神によって創造された：神は六日間で天地を再整備し、修復されました。しかし、七日目に休まれたことで、(ある人達が主張しているように)それ以降、神はもはや創造されることはなく、神の被造物がただ最初の勢いに乗じて動いていくことだけだという意味に解釈すべきではありません。私たちの主は、(第七日目<安息日>に)奇跡の御業をなされて、次ように語られました。

そこで、イエスは彼らに答えられた、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」。(ヨハネ 5 章 17 節)

人間の霊は、自然な子孫繁栄によって生物学的に受け継がれるもの(霊魂伝移説)ではなく、また、永遠の過去において「あらかじめ造られ」、後に移植するために天の倉に預けられてある(先在性の)ものでもありません。人間の霊は神の直接的な創造物です(創造論)。

彼らはひれ伏して言った。「神よ、すべて肉なるもの(すなわち人類)に**霊を与えられる神**よ。あなたは、一人が罪を犯すと、共同体全体に怒りを下されるのですか。」(民数記 16 章 22 節 新共同訳)

わたしは、永遠に争うことはなく、いつまでも怒ってはいない。わたしから出た[人の]霊が衰え果てるからだ。**わたしが造った**いのちの息(すなわち、人の霊)が。(イザヤ 57 章 16 節 新改訳IV)

主のことば。天を張り、地の基を定め、人の霊を **そのうちに造られた方**、主の告げられたことば。(ゼカリヤ 12 章 1 節後半 挿入→新改訳IV)

わたしは **すべてのものを生かして下さる神** のみまえと....キリスト・イエスのみまえで…あなたに命じる。(第一テモテ 6 章 13 節)

さらに、私たちには肉の父がいて、私たちを訓練しましたが、私たちはその父たちを尊敬していました。それなら、なおのこと、私たちは**霊の父**に服従して生きるべきではないでしょうか。(ヘブル 12 章 9 節 新改訳IV)

人が生まれる際に、その霊は、肉の墮落によって汚されることなく、聖霊との親密な関係の内に(ローマ 8 章 16 節参照)神によって直接創造されることから、人間の霊は聖霊に類似しており、まさにその名が示すように完全に霊的なものであると考えることができます。というのも、聖霊とく人の>霊を表すギリシャ語は同じだからです(プネウマ-πνεῦμα)。この本質的な霊性の原理は、人間の霊の内省的な機能や「意識」にも見ることができます(同様に、知覚的な聖霊の役割にも類似しています)。

いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知って
いようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものは
ない。(第一コリント 2 章 11 節)

c) 人の霊は、生まれる時、神によって植え付けられる： アダムは、おわかりのように生
まれ出たものではありませんでした。²⁴ 彼の体は、主によって地の塵から形成され、そ
のすぐ後、主は彼の鼻に「命を与える息」を吹き込みました。こうして人の霊が植え付け
られて、アダムは「生きた人」となったのです。しかし、この最初の両親以来、私たちの
体が造られる手段は肉体の誕生を通してです。

ですから、創世記から黙示録において聖書が言っているように、人類の生命は、始
まりと終わりの二つの時点によって区切られ、生命のはじまりの時点は、肉体の誕生で
す(創世記 4 章 1 節, ヨブ 3 章 11 節, 伝道の書 3 章 2 節, 7 章 1 節, 黙示録 12 章 2
節)。²⁵したがって、私たちの誕生において、主がアダムの体を造られた際にそうであつ
たように、主が私たちに人の霊を吹き込まれる時が、私たちの命の始まりの時点なので
す。

最初のアダム(私たち人類すべての者の先祖)は特別なケースでした:彼は主が地
面の塵から体を形成された唯一の人です。最後のアダムである私たちの主イエス・キ
リストの場合も、完全な神が真の人間性を身につけるといふ、宇宙の歴史の中で最も特
別な出来事でした。

イエス様の受胎もまた、聖霊の力によって処女から生まれるという特別なものでし
た。それはアダムの子孫である私たちの、神の怒りの下にあるという共通の運命から
私たちを救うため、人間性を共有して、その誕生も私たちに共通のパターンに従った
ものでした。つまり、普通の人間として生まれ、生まれながらにして真の人間の霊を受
けられたのです(詩篇 22 篇 9-10 節参照)。

それだから、キリストがこの世にこられたとき(すなわち、お生まれになつ
たとき)、次のように言われた、「あなた[天の父]は、いけにえやささげ物を望

²⁴ エバの体も主によって(アダムの肋骨の一つから)形成された。後述の II.5 節を参
照。

²⁵ もうひとつは、もちろん肉体的な死(アダムの墮落による自然な結果)である。

まれないで、わたしのために、からだを備えて **下さった**。(ヘブル 10 章 5 節)

その時(すなわち、ご自分の誕生のとき)、わたし[神であるイエス・キリスト]は言った、『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました(すなわち、生まれました)』。(ヘブル 10 章 7 節)

マタイ 1 章 20-21 節で天使がヨセフに「その胎内に宿っているものは聖霊による…男の子を産む **であらう**」と言ったことや、ルカ 1 章 35 節でガブリエルがマリアに「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられる **でしょう**」と言ったことから、イエス様の体は聖霊によって身ごもられたけれども、私たち皆がそうであるように、彼がこの世に来られたのは、その誕生の時であるということを説明してくれます。²⁶

これらの文中の文法(ギリシャ語の中性代名詞:「その」)と、ここでの預言は、いずれもキリストの誕生に主眼を置いています(すべてのメシアの預言の場合と同様です; 士師記 3 章 7 節; イザヤ 7 章 14 節; 9 章 6-7 節; ルカ 1 章 15 節)。

つまり、私たち皆がこの世にやってきた際に、肉体の誕生において、神が人の霊を吹き込んで下さるというパターンに沿って、主もこの世にやってこられたのは、受胎においてではなく、御自身の誕生においてであることを明らかにしています。

主の到着を告げるベツレヘムの星と天使の合唱は、主の受胎ではなく誕生を祝っているのです(ルカ 2 章 8-20 節)。つまり、主が人間(唯一の神であるにもかかわらず: ピリピ 2 章 6-7 節、ヘブル 2 章 14 節)として初めて息が吹き込まれた時点であり、それこそが父が御子を「この世に」連れてこられた時点なのです。

²⁶ だからといって、胎児は神の目には何の価値もないと言っているのでは全くない。それどころか、聖書では胎児は非常に大切にされています(出エジプト記 21:22、ヨブ記 10:8-12、詩編 139:13-16、イザヤ書 44:24、49:4-5)。さらに、聖書では子供は大きな祝福とされ(1 サム.2:1-11、ルカ.1:46-55 参照)、不妊は呪いとされ(ホセ.9:14、創.38:1-f、レビ.20:20-21、1 サム.11 参照)、妊娠は祝福、時には復讐の手段でさえある(民.5:11-31、ルカ.1:25 参照)ことに注意しなければならないでしょう。一方、子供の犠牲は忌み嫌われます(レビ.18:21; 申.12:31; 18:10; 詩.106:37-38)。

さらにまた、神は、その長子を世界に導き入れるに当って、「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」と言われた。(ヘブル 1 章 6 節)

神の霊がわたしを造り、全能者の息吹がわたしに命を与えたのだ。(ヨブ記 33 章 4 節-新共同訳)

ここでもう一度、息の例えに戻ります。息とは、生まれた後にのみ発生し、死によって終わる、私たちの肉体的な生命の機能のことです。息は、肉体的な生命の現れであり、(同義ではないが)その生命と共存しています。したがって、それは神が人の霊を私たちの体に入れて、人が生まれた時に始まる生命の完璧なシンボルであり、現れです。これが、イエス様が私たちの永遠の命の必要性を説明するために、「新しく受胎される」のではなく「**新しく生まれる**」必要があると言われた理由です(ヨハネ 3 章 3 節)。²⁷

このように、重要なのは人の霊(キリストに従って永遠の命に至るならば永遠)であり、現在において長く続かず何の利益ももたらさないこの肉ではありません。しかし、肉体は、私たちがサタンの「支配と権威」に対抗して戦う戦場なのです(エペソ 6 章 12 節)。

私たちは、人間の霊(すなわち「私たち」)が、必然的に、(悪魔の世界とそこにあるすべてのものに影響されている)罪深い肉か、聖霊のどちらかに従うことを見てきましたが、この働きの仕組みを把握するためには、まず、これまで意図的に避けてきたテーマ、いわゆる「魂」について考えなければなりません。

4. 人の二分説: この種の非専門的な(そして非聖書的な)議論では、「魂」という言葉は、上述の「[人の]霊」と同じ意味で使われることが多いです。おそらく、人間の構成(ほとんどの組織神学で扱われている「人間学」)について聖書が実際に述べていることについて、その構成における**第三の要素**とされる魂ほど大きな誤解を生んでいる概念はないでしょう。聖書の正しい理解によれば、人間は三位一体(すなわち、肉体、魂、霊からなる三位一体)ではなく、二位一体(肉体と霊が人間の性質を構成するただ二つの**個別要素**)なのです。

a) 定義と語源: 「魂」という言葉はゲルマン系の言葉で、英語言語の基底を形成するアングロサクソン系の遺産の一部です。他の条件が同じであれば、精神的なもの、非物質的なもの、生命力のあるものを表す「魂」という言葉は、ギリシャ語のプネウ

²⁷ 新生児の原理について詳しくは、ペテロ #19 をご覧ください。

マヤやヘブル語のルアハ(いずれも上記では「霊」と訳しています)の翻訳としては悪くないでしょう。問題は、「魂」は人の霊の同義語ではあっても、人間の**構成要素として追加されたものではない**ということです。

主がアダムの体に人間の霊を吹き込んだ結果、アダムは「生きた**者**」になりました(創世記 2 章 7 節)。しかし、紀元前三世紀頃から、ヘブル語のネフェシュ(נֶפֶשׁ-正しくは「存在」と訳されている)という言葉は、ギリシャ語のプシュケ(ψυχή)という非常に曖昧な言葉に訳されるようになりました。このヘブル語の単語をギリシャ語に翻訳する作業は、決して簡単なものではありませんでした。古代ギリシャの「人間学」(人間の構造)の概念は、控えめに言っても大まかなものでした。しかし、プシュケという言葉は、私たちが人間の霊と呼ぶべきものを意味するものなので、これはまずい選択でした。²⁸ この最初の先例は、七十人訳に広く受け継がれ、新約聖書の作者も当然、当時の慣例に従ってしまいました。彼らの言葉は確かに神の靈感のもとに書かれたものです。しかし、私たちがここで問題にしているのは、その後の**解釈**<翻訳>なのです。そして、新約聖書におけるプシュケは、ヘブル語のネフェシュ(魂や霊**ではなく**「存在」)を意図するものであると受け止めているなら、その解釈は問題になりません。しかし、ほとんどの英語訳はプシュケを「魂」と誤って表現しており、ヘブル語文献からネフェシュがどのような意味として用いられているかではなく、ギリシャ語の文献から手がかりを得て訳しています。さらに悪いことに、これらの英語版は、新約聖書でネフェシュがプシュケと訳されていることを理由に、ネフェシュを「魂」の意味とするなど、誤りに基づいた解釈をしています！この誤りは古くからあるもので、プラトンなどの哲学的な区別(聖書解釈には関係ない)を利用したラテン語の教父たちは、プシュケをアニムス(意志)、プネウマをアニマ(生命)と訳することが多いのです。つまり、「魂」と「霊」をそれぞれ「非物質的な人」と「生命の原理」と解釈してしまうのです(これでは意味を**逆に**取り違えてしまいます)。(精神と魂の二つについて私たちが持っている先入観のために)このような概念がいかにかに受け入れやすいものであっても、従来の常識ではなく、聖書が私たちのガイドとなるべきであることを忘れてはなりません。そのためには、創世記 2 章 7 節に戻って、真の二分説と偽の三分説を分ける重要な箇所を再検討する必要があります。

主なる神は土のちりで人(すなわちアダムの体)を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は**生きた者**(ネフェシュ)となった。(創世記 2 章 7 節)

²⁸ 例えば『オデュッセイア』第 10 巻で冥界を訪れたオデュッセウスは、部下とともにアキレス(他)のプシュケを見ている。

ここには明らかに二つの要素があります。1) 大地から形成された体、2) 主によって体に吹き込まれた霊。体と霊の組み合わせの**結果**、最初の人(ネフェシュ)は「生きたネフェシュ」(つまり「存在」と訳されるもので、これを「魂」と解釈するのは間違い)となりました。この節では、主が魂や人を第三の別個の要素として、創造したとは言っていないことに注意してください。それどころか、その逆です。人間を構成する二つの真の要素が組み合わさったとき、人間は(つまり、その全体が)魂／人(ネフェシュ)となります。ですから、議論の余地なく、この人間学的に最も重要な箇所におけるネフェシュは、**ひとりの人全体**(つまり、肉体と霊が組み合わさってひとりの生きた人間となったことであり、第三の個別の部分とかではない)を表しています。だからこそ、旧約聖書でネフェシュという言葉が使われ、新約聖書でプシュケという言葉が使われている場合、ほとんど必然的に、「魂」と訳されることの多いこれらの言葉を「人」や「個人」、「自己」(あるいは他の人称代名詞)に置き換えることができるのです(以下の欽定訳の表現を比較してみてください)。箴言 19 章 8 節; イザヤ 32 章 6 節; 使徒行伝 7 章 14 節; 第一ペテロ 3 章 20 節)。

もし人(ネフェシュ)があやまって罪を犯し... (レビ記 4 章 2 節)

したがって、「魂」(ネフェシュ・プシュケ)という言葉は、聖書の中で、ひとりの全体としての人間を視野に入れていることを明確にするために使われています。私たちは体だけではなく、霊だけでもないのです。前述したように、そして次の章で詳しく説明しますが、人間の霊は、現在の肉体の持つ限界のために、その能力が制限されています。つまり、罪深い肉体(人間の霊の意志と常に闘っている)を通して働かなければなりません。ということは、聖書の著者は、人について語る時、ひとりの全体としての人のことを言っている場合が多いということです。この場合、「魂」(ネフェシュ・プシュケ)という言葉がしばしば選ばれて使われていますが、「魂」とは、肉体と霊を併せた人間全体を意味し、聖書で「魂」(ネフェシュ・プシュケ)が使われる時には、人間の非物質的な部分**だけ**を指しているわけ**ではない**ことを理解していることが重要です。²⁹

この原則は、三分説論者の立場を支持していると誤って受け取られることの多い聖書の箇所を明確にするのに役立ちます:

²⁹ 一般に、「霊」という言葉は「人間の内面」を指し、「魂」は「人間全体」(生きた肉体を持つ人間の霊)を指します。ただし、「魂」(ネフェシュ・プシュケ)が「心」の同義語として使われる場合は例外で、つまり、現在(すなわち、復活前)の人間の内面が強調された全人格のことです。II.4.c.項参照。

というのは、神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と靈魂と＜著者の英文では「**霊を地上の生命**(プシュケ「魂」) から分^レ」＞、関節と骨髓とを切り離すまでに刺しとおして、[御言葉は]心の思いと志とを見分けることができる。(ヘブル 4 章 12 節)

生命を破壊することなく骨髓を骨から分離することが通常はできないように(特に紀元一世紀の時点では)、霊は、現実的には肉体が享受している生命と一体である--このような区別をすることができるのは、この世で最も鋭い力を持つ神の言葉だけです。

どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの**霊も魂**＜英文では**命**＞(原語では「プシュケ-魂」)も**体も何一つ欠けたところのないもの**として守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。(第一テサロニケ 5 章 23 節 新共同訳)

「命」、すなわち「魂」は、ここでは霊と体の間に挟まれて記述されています。「命」(または「魂」)は、主によって体と霊が結合された結果であるからです(創世記 2 章 7 節)。霊と体が完全に結合してこそ、「生きている魂」があるのです。

聖書に「最初の人アダムは生きたもの(プシュケ-ギリシャ語: ヘブル語のネフェシュを訳したもの)となった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった。(第一コリント 15 章 45 節)

アダムにとっても私たちに、肉体はプシュキコン(*psychikon*)、すなわち、私たちが今、この腐敗した肉体で送っている「魂」や地上の「肉体的な生活」に同調するものですが、キリストに続いて復活するときには、肉体はニューマティコン(*pneumatikon*)、すなわち、人間の霊や、キリストとともに永遠に生きる永遠の命に同調するものとなります。第一コリント 15 章 45 節の前後の節で、パウロはこの原則を説明していますので、ここで、長いですがその節を引用する意味があります:

死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、**肉体生活に適した**＜著者の英文註から直訳＞肉のからだでまかれ、**霊的生活に適した**＜著者の英文註から直訳＞霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから(明らかにあります)、霊のからだもあるわけである。聖書に「最初の人アダムは**生きたもの**(ネフェシュ)となった」と書いてあるとおりである。しかし最後のア

ダムは命を与える**霊**となった。最初にあったのは、霊のものではなく肉のものであって、その後に霊のものが来るのである。第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天に属している人々は等しいのである。すなわち、わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであろう。(第一コリント 15 章 42—49 節)

肉体は霊の家であり、私たちが今住んでいるこの肉体は、より「魂的」(つまり、今の肉体的な生活に適したもの)であるのに対し、復活の体は私たちの霊に適したものとなり、主への奉仕と感謝のために、今の私たちが想像するよりもはるかに大きな力を与えることになります:

わたしたちは、今は、[天のことがらを]鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時[主にお会いする時]には、顔と顔を合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。(第一コリント 13 章 12 節)

b) 心: 体と霊の接点: 聖書では「魂」という言葉だけが、人間全体、つまり霊と体が一体となって生きた人間の意味しているわけではありません。聖書では「心」(ヘブル語: *leb*h, לב or *lebhabh*, לבב; ギリシャ語: カルディア *kardia*, καρδιά)という言葉も、一つの構成された個人としての存在を指しますが、これは人間の内面に焦点を当て、内面のすべての面(精神、意志、感情、良心など)を包括して、**内面的な観**点から人間を指しものです:

人の**心**には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だけが強く立つ。(箴言 19 章 21 節)

また聖書では、「心」は、肉体と霊の**接点**を意味しています。つまり、聖書が「心」と言っているのは、私たち人間の内側にある霊的、精神的、感情的な機能、つまり、肉体という装置(脳や思いなどを介して)を通して、考え、計画し、行動し、決断する人間の霊を指しているのです。私たちの現在のあり様は、身体は私たちの霊を表現するための道具ですが、その働きの範囲を制限するものでもあります。例えば、現在の私たちの思考力や記憶力、感情のコントロールや表現力には、遺伝的、発育的、環境的な要因が大きく関係していますが、復活の体(ニューマティコン: すなわち、私たちの霊を完全に表現できるように設計された体-第一コリント 15 章 44 節)ではそのようなこと

はありません。サタンが自分に従う可能性のある者たちをそそのかすために使った主な誘惑が、これらの霊である天使たちに官能的な機能を与える肉体を約束したことだったことを思い出してください(ルカ 24 章 39 節「霊には肉と骨がない」参照)。彼ら<墮落天使達>は私たちが持っているものを渴望していますが、さらに私たちがやがて持つことになる住家(私たちの霊的生活に完全に適する身体)、それは現在においては復活されたイエスがそれをあらわされましたが、彼らはそれを見て驚嘆するのです。

私たちの復活の偉大な日が来れば、私たちは今住んでいる家の制限や誘惑にさらされることはありません。しかし、現在のように、この腐敗した体の中では、制限は厳しく、誘惑は激しいものです。「わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない」(第一ヨハネ 3 章 2 節)。しかし、私たちが今何であるか、奥底にある私たちの本当の姿は、聖典で使われている「心」という言葉に最もよく集約されています。「心」とは、私たちの内面の本質であり、神だけが私たちの本当の思いや動機を知ることができる場所なのです。

心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている<…いて癒しがたい—新改訳>。[人の中で]だれがこれ[の思いの何であるか]を、よく知ることができようか。「主であるわたしは心を探り、[人の]思いを試みる。おのおのに、その道にしたがい、その[すべての]行いの実によって報いをするためである」。(エレミヤ 17 章 9—10 節)

心という言葉は、ヘブル語、ギリシャ語、英語では、私たちの身体全体に生命維持のための血液を送り出す物理的な器官を意味しています<日本語では「心臓」。上記の言語では、心と心臓は同じ言葉が使われている—英語では heart(ハート)が心と心臓のどちらも意味するように>。心が、私たちが個人としてどのような存在であることを示す「真髄」として選ばれたのは、決して偶然ではありません。

体内器官の女王であり、肉体の中心に位置し、太古の昔から人間が肉体的に存在し続けるために必要不可欠な液体である血液の循環と密接に関係していることから、「心」<心臓>がこの最上位の呼称に選ばれたのは自然なことです。「**血は命**[—魂の象徴]だからである」(申命 12 章 23 節)、つまり肉体的な命であり、これが集中していると想像するのは、文学的(医学的ではないとしても)には心臓である。旧約聖書で、血とネフェシュ(魂)が結び付けられているのはこのためです(創世記 9 章 4 節)。血が流れ出すと、肉体的な生命の一部が失われるのと同様に、息と霊が離れると、霊的な生命の一部が失われるのです。私たちは、肉体的な生命の終わり、つまり血が地面に落ちるのを見ますが、霊はどこへ旅立つのかはわかりません。

だれが知るか、人の子らの霊は上にのぼり、獣の霊は地にくだるかを。(伝道の書 3 章 21 節)

肉体の罪の性質が腐敗しているにもかかわらず(ローマ 7 章 18 節)、神はその發育を監督し(ヨブ記 10 章 8-12 節; 詩篇 119 篇 73 節; 139 篇 13-16 節; イザヤ 44 章 2,21,24 節)、愛をもって肉体を養っておられること(マタイ 6 章 25-34 節)を通して、神は私たちが今持っているこの肉体のためにおられることをはっきりと示しています(1 コリント 6 章 13 節)。私たちは人の霊であり、肉体ではありませんが(第二コリント 10 章 2-6 節)、肉体の中で生きています。主のために戦う戦いは、心という戦場で行われ、内面も外面も含めて私たちの人生全体が主に喜ばれ、受け入れられるように努力します:

わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである。わたしたちはさまざまな議論を破り、神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ、(第二コリント 10 章 4-5 節)

わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。(ローマ 7 章 23 節)

なぜなら、たといわたしたちの心に責められるようなことがあっても、神はわたしたちの心よりも大いなるかたであって、すべてをご存じだからである。(第一ヨハネ 3 章 20 節)

c) 「心」の同義語として使われる「魂」という言葉: 最後に、現在の私たちの「生きるもの」の中心である「心」の代わりに、聖書の作者が「魂」を同義語として使う場合があることを指摘しておきます。このような展開は、文学の世界ではよくあることです。このような文学的な図式を「シネクドーン」といい、全体が部分に置き換えられます。「魂」を「心」に置き換えた場合、「生きている人」の全体が、その人間の核(すべての思考、感情、決断、良心の呵責が生じる場所)に置き換えられます。この置き換えは、英語でも類似しています。“my very being longs for thee”(私の存在そのものがあなたを求めている)。この一般的な文学的用法を、「魂」が何らかの形で私たちを構成する独立した実体であると誤って受け取る場合にのみ、解釈の問題が生じます(むしろ、私たちが見てきた「存在」全体は、私たちの身体と霊の生きた結合の中に包含しているのです)。

あなたは心を尽くし、魂(すなわちあなたの存在すべて)を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。(申命記 6 章 5 節 新共同訳)

人がその魂(=心-欽定訳)で考えるように、その人もそうである。
(箴言 23 章 7 節-英文直訳)

5. エバの創造(創世記 2 章 18-24 節): これまで私たちは、人類の両性を含む、大文字の "m" を持つ "Man" という一般的な意味で人類を語ってきました。エデンの園での最初の両親の状態と、彼らの誘惑、墮落、裁きに移る前に、まず、エバの創造とその意味について聖書が何を語っているかを考えなければなりません。サタンがアダムとエバを攻撃したことと、アダムとエバの罪がその後のすべての男女関係に及ぼす影響を理解するためには、まず前置きとして、墮落前の楽園での最初の男と最初の女の関係の状態が、墮落後にエデンの園から追放されたときの状態とは大きく異なっていたことを理解する必要があります。

また主なる神は(17 節でアダムに善悪の知識の木を食べてはいけないという指示を与えた直後に)言われた、「**人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう**」。そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。(創世記 2 章 18—24 節)

アダムがそうであったように、エバの体の創造も独特です。アダムの体は地の塵から造られ、エバの体はアダムの体の一部から造られました。しかし、エバの内面的な部分、つまり人間の霊については、上記の箇所には何の追加情報もありません。しかし、創世記 1 章 27 節には、アダムとエバの霊的な本質の創造についての記述があります。

(26)神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」(27) 神は人(「その人」—すなわちアダム)をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、**男と女**に彼らを創造された。

「人」(ヘブル語では定冠詞なし)から「その人」(ヘブル語では定冠詞付き)への移行は非常に重要です。26 節は、集合的に**すべての人間**(すなわち「人」)に適用されるので、人類は全体的なまとまりとしても神のかたちと似姿を持っていなければならず、その結果、神の権威に応答する義務があると言えるでしょう。しかし、27 節では、単数形に変わったことで、焦点が一般的なもの(全人類)から特定のもの(特にアダム)について述べていることを意味しています。ここでは、神のかたちがアダムに寄与されたとしていますが、節の終わりに「**男と女**」が出てきても、その<「神のかたちに」>という表現を繰り返してはいません。この明らかな(しかし見た目上の)矛盾は、新約聖書でも繰り返されていて、パウロは、第一コリント 11 章 7 節で、男は「神のかたちであり、栄光」としていながら、他方では、女は「男の栄光」であるとしてあり、また同じ教会に宛てた第二の手紙(第二コリント 3 章 18 節)では、私たち全員(明らかに男女を問わず)が「**同じかたちに** 変えられていく(キリストに似ていく)」と述べています。

では、私たちは何と言えましょうか？ 女性は神のかたちを共有しているのでしょうか、いないのでしょうか？ 創世記 1 章 26-27 節は、この質問に対する答えの始まりです。その肯定的な答えを注意深く避けているにもかかわらず、否定的な答えもこの箇所にはありません。実際、この二つの節には、男女の間に**霊的な違い**を見出す根拠がありません。唯一の違いは、すでに述べた二つの点です。

1) 男性と女性は別々に分類されています。しかし、26 節の全体的な記述を見ると、この区別の根拠は**霊的なものではない**という結論は避けられないように思われます。なぜなら、人類の創造の意図に関するこの記述の中では、霊的な区別は何も言及されていないからです(もし本当に男性と女性が霊的に区別されるのであれば、ここで何か言われているはずです)。したがって、男性と女性の人間の霊は本質的に同じであり、次の節で男性と女性のカテゴリーに言及しているのは、それぞれの**肉体**を指していると考えなければなりません(後述)。

2) 27 節では、神のかたちがエバに寄与されたことが肯定的に述べられてはいませんが、これはかたちに造られなかったと言うこととは全くちがいます。

上記の最初のポイントは、聖句によって容易に裏付けられます。キリストにあって、霊的な関係においては、「男も女もない」(ガラテヤ 3 章 28 節)し、男女は等しく「永遠の命の賜物を受け継ぐ同胞」(第一ペテロ 3 章 7 節)であり、永遠には、(今扱っている明白なジレンマの元となっている)聖書に書かれている結婚制度のそれぞれの役割から解放されます(マタイ 22 章 30 節)。また、私たちの希望、復活、報酬について書かれている聖書のすべての箇所において、「無言」ではあるものの、永遠の世界において男女の性別の区別があるという証拠は主張はされていないことも付け加えることができます。

上記の第二の点<2>は、私たちの現在の地上に置かれている状況によっても影響されます。エデンの園ではそうではありませんでしたが、墮落してからは、夫と妻の関係は権威の問題を引き起こします。キリストの共同相続人である女性は、明らかに神のかたちと似姿を共有し、男性が享受しているのと全く同じ霊的本質にあずかっているはずですが、墮落によって(サタンが人間の地上での支配権を奪い、完璧さを苦勞や苦難に置き換えてしまい)男性の役割が変わったように、女性の役割も権威関係に関して劇的に変化しました(下記第IV章参照)。

その結果について、聖書は、女性は霊的に平等ではあるものの、平等を強調するあまり夫の権威を過少視することとしてはいません。神の前では私たちは皆平等ですが、この現在の墮落した体においては、私たちは神によって立てられている様々な権威下に置かれています。そしてその権威に対して私たちがどう正しく反応するかが、現在私たちの周りで目に見えない形で繰り広げられている霊的な戦いと密接に関係することになります(エペソ 6 章 11-12 節)。

エデンでは、アダムとエバの体がそれぞれ違っていて、それぞれの役割も違っていました。完全な楽園では、この男女の区別は、権威的な意味合いはありませんでした(しかし罪が入ったため、人間関係のあらゆるレベルで、権威の行使が絶対に必要となったのです)。

なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たのだからである。また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのである。それだから、女は、かしらに権威のしるしをかぶるべきである(つまり、正しく整えられた髪の毛を持つべきである)。それは**天使たちのため**でもある。ただ、**主にあって**は、男なしには女はないし、女なしには男はない。それは、女が男から出たように、男もまた女から生れたからである。そして、**すべてのものは神から出たのである**。(第一コリント 11 章 8-12 節)

この聖句は、私たちが上で示唆したこと、すなわち、この件について二つの見方があり、それは表面上矛盾しているように見えるだけであることをはっきりと確証しています。天地創造は、パウロが上で概説した両方の原則を教えています。

1) 天地創造の順序においてはアダムが先に造られたこと、2) 神の前で男女が平等であること、です。ここで重要なのは、創造順序におけるこの優先権が権威の意味を持つのは墮落後のことであり、結婚における権威関係は墮落と創世記 3 章の裁きの結果であるということです。

上記の聖句＜第一コリント 11 章 8-12 節＞では、パウロは創世記 1 章 26-27 節で扱われているこの二つの原理の順序を入れ替えています。パウロはまず、コリントの女性が異教徒のやり方に倣って喪に服して髪を掻き乱したりしていることを非難します（復活への希望を恥じる行為です：申命 14 章 1 節、ミカ 1 章 16 節参照）。

パウロは、創造の優先順位を論拠として、このような行為が、創造の優先順位によって夫が受けるべき尊敬を捨て、夫を辱めていると主張しています（第一テモテ 2 章 13 節参照）。しかし、コリントの女性たちが、この間違いを正して夫の権威に応える義務があることを確認した上で、彼は、神の前に男性が女性よりも何らかの意味で「優れている」という誤った結論を下すことがないように、本当は、私たちは皆、「主にあって」平等であり、男性が有利になることも、女性が不利になることも全くないと告げています。

男性も女性も相手なしでは存在できないのですから、神がどちらの性別にも重きを置かないのは当然だという教訓を、パウロは天地創造の自然の摂理から教えています。

実際、すべてのものは神の創造の御手によるので、男女ともに高ぶる理由はなく、すべての人が神の権威に従うのです。この「すべては神に由来する」という最後の点が最も重要なのです。夫が妻に対して持っている権威、雇用者が従業員に対して持っている権威、政府の役人が市民に対して持っている権威、牧師が信徒に対して持っている権威、これらの権威はすべて、神の賢明で主権的な目的のために神によって立てられたものであり、この肉体にいる限り、男性も女性も、神によって立てられた様々な権威に従うべきです。

現在、男女の間で権威が区別されている主な理由は、結婚関係とそれが両当事者に課す義務ですが、永遠の視点では「めとったり、とついたりすることはない」（マタイ 22 章 30 節）のです。

現在あるような婚姻制度における権威の区別は、腐敗も婚姻もない永遠の世界では、見られることはないことでしょう。しかし、エデンの最初の夫と妻の関係は、私たちの現在の状況と将来の希望の中間くらいに位置しています。園では結婚がありました（結婚関係の中心となるいくつかの点は、最初の頃と同じように今も続いています。マタイ 19 章 3-9 節）。新約聖書の書簡のエペソ 5 章 21-33 節、コロサイ 3 章 18-19 節では夫の妻に対する権限が具体的に詳しく述べられていますが、創世記 3 章で述べられている夫の妻に対する原則的権限についてはあまり具体的には、述べられていないように見えます。それには、最も単純な理由が考えられます。つまりそれは不必要であったからです（第Ⅲ章を参照してください）。

Ⅲ. パラダイスの現状

ヘブル語で「喜び」を意味するエデンは、完璧な場所で、人間が本当に幸せになるために欠けているものではなく、人生を辛いものにするものもありませんでした。神は、アダムを園の管理者とし、神の委任された権威、すなわち地上における神の「執政官」とされました（創世記 1 章 26-30 節）。その結果、アダムに課せられた仕事は、満足のいく楽しいもので、きついものではなかったことでしょう。

－ 園は、主が特別に作られた川や霧のシステムによって灌漑されていました（創世記 2 章 6, 10-14 節）。

－ 樹木は、育てたり世話をしなくても、「見て美しく、食べるに良い」様々な食物をもたらしました（創世記 2 章 9 節）。

－ 肉体的な労働と共に、創造された動植物の多岐にわたる分類などのやりがいのある知的な労働も与えられ、退屈することはありませんでした（創世記 2 章 19-20 節前半）。

－ 霊的にもよく養われていました。主は、園の中央には、霊の力を回復させてくれるいのちの木を置かれ、（創世記 2 章 9 節、黙示録 22 章 2 節）、仕事が終わった後には、私たちの最初の両親を訪れ、霊的な交わりを持たれました（創世記 3 章 8 節）。

アダムが欠乏していた一つのことを、神はすぐに満たして下さいました。それは、彼の必要としていた仲間です。この欠乏を解消するために、神はエバを創られたのです。「人がひとりであるのは良くない」（創世記 2 章 18 節）。主はアダムを創られる前にこの必要を知っておられました（創世記 1 章 28 節の「生めよ、ふえよ」という命令がその

ことを強調しています)。しかし、アダムは私たち一人ひとりがそうであるように、肉体と精神を持つ神聖な存在である人間であったため、神は単に動物にされたようにアダムの相手を神が与えるのは適切ではないとお考えになりました。アダムには、被造物を観察して、必要としている自分の相手を見つけることが許されました(創世記 2 章 19-20 節)。その結果、アダムは自分の必要としているものが何であるかと、神がアダムにエバを与えてくださったことの両方を理解することができるようになったのです(創世記 2 章 23 節)。

彼のために、ふさわしい助け手を造ろう(創世記 2 章 18 節後半)

上記の節は、私たちが今議論している点、すなわち、園での状況は異なっていたことを理解する上で重要です。エバは召使いではなく、文字通り「助け手」(ヘブル語: עֶזְרָא, エゼラ)です。次に重要なことは、彼女は「彼に應える者」(ヘブル語: כְּנֻדָּה, ケネクドー)、つまり、すべての面において彼を補完し、満たす者ということです。最初の両親が緊密で親密な関係を持つようになるというこの聖句の予告は、エバの創造によって強調されることになります。主がアダムの肋骨の一つからエバの体を造られたことで、上記の創世記 2 章 18 節後半で説明した霊的なものに肉体的な次元が加わりました。つまり、アダムとエバは、なお二人の異なる人間であるために、彼らの肉体と霊はそれ以上近いものとなることはできませんでした。主は、アダムが求めていた交際相手として、あらゆる面で答えとなる妻をアダムに与えられたとき、アダムの言葉には、感謝だけでなく、この神から与えられた格別な親密さと、親しい関係に対する賞賛の気持ちが込められています:

そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。(創世記 2 章 23 節)

理想的には、園でのパターンに基づいて、結婚関係は今でも当時の状態を維持し、他のすべての人間関係の中で親子関係をしのぐ近いものとなっています。

それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。(創世記 2 章 24 節)

このように、聖書はアダムとエバの結びつきの強さを強調していますが、堕落以前の最初の男女の間の権威の問題については、あまり具体的な説明をしていません。私

たちは、アダムが最初に創造されたこと(第一テモテ 2 章 13 節参照)、エバがアダムのために創造されたこと(第一コリント 11 章 8-9 節参照)、そしてその逆ではないことを知っています。

しかし、創世記にも新約聖書にも、最初の夫婦が墮落した結果として主が創世記三章(16 節後半)で設けられたような夫婦の権威関係は、＜創世記3章16節後半以外では＞述べられていません。その理由は、先に述べたように、樂園ではそのような権威関係が不要であったからです。

例えば、アダムとエバには金銭的な問題も、性的な問題もありませんでした。今日、夫婦間の問題が、主にこの二つの要因に起因する割合が非常に高いことを考えると、この最初の結婚が、それ以降のすべての結婚とははるかに異なる「戦場」で行われてきたことがすぐにわかります。

さらに言えば、私たちの最初の両親は、善悪を知る木の実を食べる前は罪を犯してはおらず、アダムもエバも、最初は利己的であったり、人を傷つけたり、自己中心的であったり、無神経であったりすることはありませんでした。

園は魅力的で可能性に満ちた世界で、そのすべてが完全に正当なものでしたが、一つだけ例外がありました。最初の両親が禁断の木の実を食べない限り、何も奪われることはなく、何も不足することはなく、無邪気に考えていた個人的な野心や願望が否定されることはありませんでした。つまり、最初の男と最初の女の間には、権威関係が問題になるような余地は本質的に存在せず、それは全く必要のないことでした。

イブの意志がアダムの意志にぶつかることはありませんでした。たとえそのようなことを思いついたとしても(二人の無邪気さと完璧な環境を考えると疑わしいのですが)、アダムがイブに「やれ」「やるな」と言えることは何もなかったからです。実際、**唯一**の否定的な禁止事項は、善悪を知る木を食べてはならないという命令であり、この命令は神ご自身からのもので、アダムとエバの両方に等しく適用されるものでした。二人が神の御心に従う限り、夫婦間の問題は起こり得ないので、「どちらが主導権を握っているか」という問題は全く問題になりませんでした。

エデンの園の状態下では、神は霊的な新種の天使とは異なる肉体を持った生き物がその人生を完全に全うするために、霊的肉体的手段を与えていました。アダムとエバ(とその後に続くであろう子孫)は、あらゆる点で完璧でありながら、罪から完全に解放された樂園で、神の与える恵みをいつまでも体験する機会を持っていたのです。

完璧な状態が続いていた短い期間でさえ、墮落した天使たちに自分たちの計画の無意味さとサタンの約束の空虚さをさとするのに十分な長さであったと言えるでしょう。というのも、神が最初の両親に与えた霊 **そして** 肉体の完璧な組み合わせは、悪魔が考えうるどんな被造物に与えられたものよりも明らかに優れていたからです。

もちろん、サタンはこの状況を分析するのに十分考えようともせず、最初の両親に樂園を捨てさせるための巧妙な方法を見つけました。しかし、あまりに悲しいこととして園を惜しむ前に、この大失敗も神のご計画によって予期されていたものと考えるべきです。

祝福された復活の日には、神とその御子を愛する私たちのために神があらかじめ用意して下さっておられる新しい体はいつまでも朽ちないもので、贖われた人類の究極の姿は、エデンの園のアダムとエバでさえ想像も及ばない輝かしいものになることでしょう。

IV. 墮落

神の権威に道徳的に応答できる新しい種の霊的生物＜人間＞が創造されたことを、サタンは当然のことながら、自分の存在を危うくする脅威、さらには直接的な挑戦と受け止めました。アダムとエバをサタンが「標的」にしたことには疑いの余地はありません。

人類は...

- 自分＜サタン＞が無情にも追い出された世界(現在は新しく建て直された世界)に代わりに置かれた。
- 地球とその生物に対する神から委任された権限を＜人類は＞委ねられた。彼＜サタン＞が以前乱用したまさにその地球の責任が＜アダムとエバに＞与えられた
- ＜人類は＞増え広がることが命じられた。

この最後の点は、悪魔にとって特に気になる点だったに違いありません。完璧な状態であれば、この墮落した手下たちと道徳的に重要なすべての点でよく似ている新し

く造られた生物＜人類＞が、サタンの信奉者の数と同じくらいになるまで、そう長くかかることはないでしょう。

その時点で、サタンとその天使たちは、神の世界で事実上、人と一対一で入れ替わることになります。そして、従順で、神に仕え、道徳的に責任のある生き物の集団で地球が満たされ、サタンとその追従者全員がしているべきだったくけれども、そうしてなかった＞事を、＜人類が＞従順に主に応答するようになった時、火の池はすでに設けられており(マタイ 25 章 41 節、黙示録 20 章 10 節)、判決はすでに下されていました(ヨハネ 16 章 11)。

裁きの執行が迫っていることは疑いようがありません。この新しい被造物が、神に与えられ、神によって創られた**肉体**を持っているということを目の当たりにして、サタンにとっては失望以外の何物でもなかったことでしょう。この肉体は、悪魔が神を非難し、神に従おうとする者を誘惑する際の中心的な主題でした。

サタンとその天使たちは、神を出し抜くことはもちろん、神に対抗することも不可能であることを理解していたと思われます。しかし、サタンは神が次の何をするかを黙って見ていることはしませんでした。

1. 誘惑：サタンは、人間が無制限に増え続けることで自分が脅かされていることに気づいて、徹底的に戦うことを選んだのですが、これはサタン(とその仲間)が自分たちの悪をわかっていなかったと言う事はないでしょう。

もし人間が彼の反逆の証拠であるならば、その証拠を破壊し、もし人間が彼の代替えであるならば、その代替え者たちを悪魔は排除しようとするのです。神に応答しようとするのではなく、むしろ、あらゆる場面であらゆる方法で神に反抗するのです。

a. 神の最後のオリーブの枝：神が人間を創造したのは、サタンとその手下を牽制し、それにとって代わるという目的以外にもあったのではないかという疑問が湧くかもしれません。まだ恵みの道が残っていなかったのでしょうか。最初の両親が誘惑されて墮落する前、人間がまだ 罪に堕ちていなかった頃、アダムとエバは道徳的な意味で、墮落する前の天使達とよく似ていました(知識が限られているという例外を除いて)。その時点では、最初の両親はメシアを必要としていませんでした。

彼らはまだ罪を犯してはおらず、悪魔も彼らに関してまだ手出しをしていませんでした。神は地球を回復させたのですから、サタンとその従者たちが望むなら、彼ら(サタンとその従者たち)をも回復させることができたのではないのでしょうか。

この墮天使たちはアダムとエバを観察していたはずですが。それによって、宇宙の神の対抗することが不可能であることを悟り、自分たちの結論を見直すことになったとしたらどうでしょうか？

もし彼らが神が地球を回復し、この新しい種を創造して、恵み深く養っておられることに、神の完全なご性格を特徴づける恵みのひとかけらについて再確認していたとしたらどうでしょう。

(創造当初の無邪気な状態での)人間の肉体によって様々な制限の下にある霊を見て、制限を受けていない霊を持つサタンとその従者たちが、自分達から、神が後で何かを奪おうと意図していたわけではないと受け止めたとしたらどうでしょうか？

つまり、人間が、選ばれた<墮落しなかった>天使達にとって教訓を示す存在であるように、墮落した天使たちにとってもそうであったとしたらどうでしょうか。

神の愛と慈悲が無限であることに疑いの余地はありません。実際、私たちは、無限の神がどれほどご自分の被造物を愛しておられるか、おぼろげにしか理解していません。神は、「一人も滅びることを望まず」(第二ペテロ 3 章 9 節, 第一テモテ 2 章 4 節参照)、私たちの頭の毛の数まで知り(ルカ 12 章 7 節)、迷子の羊を一匹残らず探し出し(マタイ 18 章 12-14 節)、なくなった硬貨を一枚残らず探し出します(ルカ 15 章 8-10 節)。

これらの聖句は確かに人間のことを指していますが、神は天使たちのことも気にかけておられ、「そのすべて<の天使>に名をつけられ」(詩篇 147 篇 4 節)、「一人も欠けない」(イザヤ 40 章 26 節)ようにしておられます。

それであるなら、楽園にいるアダムとエバを観察していた悪魔にとっては、それは神の力、神の正義、神の恵み、神の憐れみを認識する「最後のチャンス」ではなかったのでしょうか。

アダムとエバが園に置かれたことは、神が悪魔に対して取った行動と考えるのが正しいでしょう。³⁰ しかし、同時にそれが主の、道を踏み外した生き物に対する最後のオ

³⁰ デリッチュが指摘するように (前掲書 3)、神が人間を悪魔の支配から守ることは、エデンにおいてさえも真実であり、悪魔の存在 (蛇の所有) は「人間がそれを克服するために対立させられた破壊的な力」(SOBP, 75) であった。

リーブの枝<悔い改めのために差し出された機会>であり、墮落した子供たちに主のもとに戻るようにとの最後の訴えであったとしたらどうでしょうか。

結局、サタンはアダムとエバを攻撃して滅ぼそうとすることで、自分の中にある悪を否定できない形で証明し、神がサタンを倒して、取って代わるための不可抗力のメカニズムを動かすことになったのです。

しかし、神の恵みと善良さ、被造物に対する深い愛がはっきりと示されるのは、特に墮落後の神の備えにおいてです。罪に陥った私たちは救い主を必要としましたが、主はイエス・キリストを与えて下さいました。

私たちを救うために御子を喜んで死に渡されたこと以上に、神が被造物に対して持っておられる愛や、被造物のために犠牲を払われたことを証明するものがあるでしょうか。

神が私たちに主イエス・キリストを提供して下さったことは、悪魔のすべての嘘に対する究極の反論です。墮落した被造物の罪を償うために、ご自分の御子を犠牲にして死から救い出す神の正義と慈悲には、全く疑いの余地がありません。

サタンとその従者たちは、この神の恵みの最終的な証明を拒むことによって、自ら神の怒りの杯を取り、心を頑なにしておそれを飲み干して、自分たちの罪の杯を満たすことを決意したのです(第一テサロニケ 2 章 16 節後半参照)。

このようなサタンとその従者たちの理不尽な行動は、主の「わたしの民を行かせなさい」という要求を拒否したパロを思い出させられます。

これは、神の力、正義、憐れみに対する、信じられないほどの心の硬化です。その後の人間の歴史の中で起こった神の計画に対する全面的な反抗は、サタンとその天使たちの罪深さを明確に示し、悪魔の罪と受けて当然の運命を確証させてくれるものは山のように積み上がっています。³¹

聖書の中には、悪魔の側には、力は劣るが道徳的に似ている別の種族への神の恵み深い対応に注意を払おうとする気配はなく、「学習」や「悔い改め」が悪魔の集団の頭の中に真剣に入ってきた形跡也没有ありません。

³¹ 「出エジプト記 14 章：ファラオの心を硬くする」の第 2 部をご覧ください。

それどころか、アダムとエバに対するサタンの獐猛で狡猾な攻撃は、かえって神が悪魔とその従者たちを裁かれたことがまさしく正しかったと、明らかになっています。

なぜなら、この物事の新しい展開の始まりに対するサタンの反応は、この新しい生き物を破壊し、消滅させ、**殺害**することだったことは疑いの余地はありません(ヨハネの福音書 8 章 44 節)。

神の抑制の御手がなければ、悪魔とその軍勢は、今もなお、地上で息をしている私たち全員をすぐにでも殺していたでしょう(ヨブ記 1-2 章参照)。

もちろん、神はその恵みの中で、悪魔とその天使たちが、その天使の優勢な能力によってアダムとエバをこの惑星から吹き飛ばすことを許すわけにはいきませんでした。そこで、サタンは、誘惑という最も効果的な方法で反撃したのです。

b. 善悪の知識の木：最初の男と女は、すでに見てきたように、その無垢な心で思いついたことを何でも自由に行うことができたようです。ただ、心ゆくまでかつ健全に楽しめる完全な自由の原則に対する唯一の例外は、善悪の知識の木の実を食べることを、神がアダムに禁じたことでした。

主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。(創世記 2 章 16-17 節)

この木が何なのか、なぜエデンにあったのかを説明する前に、この節の議論では見落とされがちな重要なポイントの一つを取り上げます。神は恵み深くも、アダムに「**してはいけない**」と言っただけではなく、「**なぜしてはいけないのか**」を教えて下さいました。

主は、直接的な禁止事項を明示する以上の義務はないにもかかわらず、従わなかった場合の罰について隠さずに真の理由を説明し、この特定の木の实を食べることの禁止を強調しました。これは決して小さなことではありません。アダムとエバは「無邪気」だったかもしれませんが、それは「いやだ」というだけで何も理解できないような子供のような状態だったということではありません。³² 神は彼らを子供のように扱いませんで

³² 古代文明（エジプト、イスラエル、ギリシャ、ローマなど）の人々は、個人レベルでは

した。なぜなら、彼らは私たちと同じように成熟しており、分別があったからです(ただし、罪はありませんでした)。

神は、これについての真実を完全に開示しました。不従順をしたら死が待っているという非常に重要な真実を、サタンは(この真実を歪曲して)攻撃することにしたのです。神は何が起こるか完全に知っておられましたが、それでもアダムとエバにこの重要な知識を分け合うことを差し控えることはされませんでした。

アダムとエバは、霊的な被造物として、神の権威に道徳的に応答するように創造されていたので、禁止事項だけでなく、それに従わなかった場合の**結果**も知らされていることが重要だったからです。

アダムとエバは、園で善と悪を知る必要はありませんでしたが、神に反抗したときの罰を知る必要はありました。そのような知識がなければ、その罪の重大さ、全く取り返しのつかなくなることを理解することはできなかったでしょう。

アダムとエバは、この命令に違反することの重大さを確かに理解していました。なぜなら、主なる神ご自身がそれを明確にして下さったからです。そうでなければ、神の完全なご性質にそぐわなかったでしょう。

善悪の知識の木については、神ご自身が植えられた(創造された)ことを覚えておく必要があります。

また主なる神は、見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ、更に園の中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。(創世記 2 章 9 節)

神の創造の手から生まれたこの有名な木は、決して悪ではなかったという点を理解しておく必要があります。むしろ、(神の具体的で明確な戒めに反して)この木を食べることで、善悪を区別する能力が拡大し、「善悪を知る」能力が与えられたのです。

現在の世界の人々より優れた知性を持っていたように、人類の最初の数世代も同じであつたろう(さらにその程度は高い)。確かに現代は集合知が発達しているが、男と男、女と女を比較するなら、数千年前の祖先にはかなわない。例えば、ローマ人は一人で何千年も続く橋をかけることができ、私たちは皆コンピューターを使えるが、それを動かす部品を全て自分で作ることはできない。

悪魔の世界の真っ只中にいる罪深い人にとって、言うなれば「善と悪」を区別する能力はとてつもなく重要です。この良心の目覚めは、アダムとエバが禁断の果実を食べて罪を犯した結果、今では生まれながら私達の一部となっています(ローマ 2 章 14-16 節)。

生まれつき罪深い人にとって、何が罪で何が罪でないかを明確に把握することは、悪魔の世界で生きていくために必要不可欠です(言うまでもなく、私たちが完全に罪深い存在であり、救い主を必要としていることを示す指標でもあります: ガラテヤ 3 章 23-25 節参照)。

しかし、サタンによって悪に染められた宇宙から隔離されていた園の二人の完全な人にとっては、そのような知識は全く必要なかったのです。彼らは誘惑にさらされることも、罪を犯すことも一切なかったのです。唯一の例外は、善悪を知る木の実を食べることが禁止されていたことです。

この禁止事項を破るなら、相応の罰が課せられることになっていました(しかし二人は園の中のどの木からも代わりに 同じような喜びを得ることができたはずです)。ここに神の知恵と恵みがあります。

アダムとエバは、善悪の知識の木の実を過度に欲しがることもなく、「善悪」の知識を得る必要性にも関心はありませんでした。しかし、神はその恵みと知恵をもって、彼らが神の命令に違反した**場合**(つまり、罪を犯して霊的な死を経験した場合)、彼らが墮落したことで必要となる知識、すなわち、何が善で何が悪か、何が正しくて何が間違っているかについての知識も得ることができるようにして下さっていたのです。

罪を犯した後に、神の善と自分の罪深さを理解し、悪魔の惑わしを見分けるためには、この知識が必要でした。

エデンの園の中央にある善悪の知識の木の横には、もう一本の木がありました。それが「命の木」です。命の木は、神が創造した植物の中で最も崇高なものでした。その果実は、霊的な回復と肉体的な若返りをもたらしました(創世記 3 章 22 節, 黙示録 22 章 2 節参照)。

それはアダムとエバの世界の中心にあり、おそらく「涼しいとき」に主と会った場所であったと思われます(創世記 3 章 8 節参照)。もし、禁止されているもう一つの木に手

を出さなければ、彼らは、命の木の実で常に再生され、回復しながら、この完璧な樂園の真ん中で永遠に至福の時を過ごすことができたことでしょう。

では、アダムとエバが全く必要ともしない、実際には神に背いてその実を食べる場合にのみ必要となる種類の知識の木が、なぜあったのでしょうか？

なぜ主はその木を、再生と霊的な交わりの中心であり手段である命の木のすぐそばに置かれたのでしょうか？ これらの質問に対する答えは簡単です。すぐそばに、実を食べることが禁じられている木を造ることによって、神はアダムとイブに神の意志に従わないという選択肢を与えられました。神は彼らの最善の益を考えて、選択肢を与えられたのです。そして違反や反抗は直ちに霊的な死をもたらすものでした。

そして、神が不従順の結果がどうなるかを隠されなかったように、善悪を知る木そのものも彼らの目から隠されませんでした。アダムとエバが直面した選択について、これ以上明確なものはありません。それは、生と死がこの二つの木に並存していたことです。

一方の木は、彼らが毎日経験していた命と祝福の源であり、もう一方の木は、神によって禁止され、(これまで見てきたように)神によって**説明された**死の源でした。

また、神は御自身を**望む**崇拝者、従者、信者を求めておられることは、これまでに長々と述べてきました(本シリーズの第Ⅰ部)。神は私たちを力づくで強制的に御心に従わせるようなことをされる方ではありません。私たちの神は、愛と慈しみに満ちた**善き**神であられ、私たちが心の中で神に反抗しようと決心していても、神を選ぶように強制することはありません。

しかし、聖書や人間の経験、アダムとエバの記録からも明らかなように、神は常に問題を明確にして下さいます。主の御心を受け入れることは、闇の中にある私たちのために主が愛情を込めて築いてくださった恵みの道に従うことです。一方、主に逆らうこと、主の意志に反抗することは、奮闘が必要です。

自分の意志で、傲慢で自己欺瞞的な「やぐらを蹴る」という行動は、その始まりから破滅的な結末まで、私たちを真の道に導くために主が築いて下さった恵みと愛の障壁を、すべて打ち破ることになります。

生まれながらの罪人である私たちは、「(最初の両親のように)園を維持する」という状況ではなく、「救いを必要としている」という状況にあります。神が造ったすべてのもの、すべての自然、すべての科学、私たちが知っているもの、知っているもの、考えているもの、感じているものは、神の存在を宣言しています(詩篇 19 篇 1-4 節、ローマ 1 章 18-21 節)。

しかし、私たちが自分自身や同胞について気づいていることは、私たちが罪深い者であるということ、そして事実上、神の助けと救いを求めて叫んでいるということです(ローマ 7 章 7-11 節)。

園のアダムとエバが、死を避けるために神の明確な導きに従わなければならなかったように、園の外に出た彼らと私たちは、ただイエス・キリストの福音にある神の真理の強力な磁力に従うことで、イエス・キリストによって死の超越をすることができます(エレミヤ 31 章 3 節; ホセア 11 章 4 節; ヨハネ 6 章 44-45 節)。

そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう。(ヨハネ 12 章 32 節)

c. 悪魔の戦略: 完璧に創られたアダムとエバが、引き続き樂園を楽しむためには、「死ぬ」ことになるからしてはいけないと言われたことに従わなければいけませんでした。彼らは、神が何をしてはいけないと言われたかをよく知っており、神の禁止事項に違反した場合の悲惨な結果について、良く理解していました。彼らは一生の間(創造から墮落までの期間)、神の好意、祝福、善良さだけを経験していました。さらに言えば、善悪を知る木の実を食べて、神の御心に背く**理由は何もありませんでした**。むしろ、悪魔の巧妙な攻撃がなければ、アダムとイブがこの禁断の実を食べようという思いを持ったかどうか、ましてや実際に食べることになったかどうか疑わしいです。

サタンがアダムとエバに対抗しようとした動機は、すでに述べたように明白です。神の意志に喜んで従う新しい被造物が増え広がることは、墮天使達以外の被造物(しかも肉体を持った被造物)が神に従うことができ、また従うであろうことが明らかになるだけでなく、それによって、サタンを裁く神様を誹謗するサタンの立場がなくなることになります。その人間が増え広がることは、自然の成り行きとしてサタンとその天使が置き換えられることが予測されます。罪を犯さないことを選んだ人間は、選ばれた天使たち<墮天使以外の天使たち>を完全に補充し、神との和解を選ばない墮落した天使の代替えにふさわしい存在となったことでしょう。

悪魔が攻撃を開始するまでの時間については、正確な情報はありません。悪魔は自分の経験から、アダムとエバが自分で罪を犯すまで待つて見てみようと考えたことでしょう。³³ 結局、悪魔は自分を誘惑する存在はいなかったにも関わらず、罪を犯したのですから。どんな種類の被造物でもいずれは自分と同じように行動する(つまり、遅かれ早かれ罪を犯して神に反抗する)というのが、神に対して罪を犯すサタンの言い訳の一つだったと考えられます。

しかし、天使と同じ自由意志を持つ人間アダムは、悪魔が何かをすぐにでもしなければ、神に罪を犯す気配のないことを悟りました。サタンとその天使にとって、宇宙の

³³ 聖書の年表の「7 日説」によれば、アダムとエバは墮落する前に少なくとも数十年間は園にいたことになる(本連載第 5 回参照)。

支配を横領してしまおうという誘惑は抗しがたいものでしたが、善悪の知識の木は、アダムとエバにとって、そのような影響力はありませんでした。

このように、アダムとエバが神の定められた境界線を越えようとしなかった理由は、彼らの知識と能力には限界があったことに根ざしています。地上において肉体を持つアダムとエバは、当時いかなる場合も地上を離れることができず、宇宙の霊的な現実について十分な知識を持っておらず（現在も持っていませんが）、天使が持っていたような広範で多面的な知識を持っていませんでした。³⁴

アダムとエバが天使の力や能力を持っていないことは、誘惑に抵抗する上での強みとなりましたが、強さには弱さが伴うもので、悪魔はこの新しい種族の弱点をいち早く見抜いていました。

最初の男女を肉体的に破壊することを神から禁じられていた悪魔は、代わりに霊的な攻撃を巧妙に計画しました。アダムとエバが（天使に比べて）霊的、肉体的限界を持っていることが、不従順になる可能性を遠ざけていたとすれば、同じ限界が、悪魔にとって、より巧妙な攻撃を可能にしていたのです。

アダムとエバは、神の全能性、偉大さ、そして特に真実性についての認識が、天使の認識に比べてはるかに不足していましたが、これを悪魔は攻撃に利用したのです。サタンの従者たちは、天使の膨大な知識と認識を持っていましたが、肉体は持っていなかったため、悪魔は、肉体を持つ体験をしていないことを利用して天使達を墮落するように説得しました。

一方、アダムとエバは完全な肉体を持っていましたが、肉体的な限界があるために、天使の知識と認識を持っていなかったため、サタンはこの部分を使って攻撃しました。神の栄光、力、そして絶対的な真実性について十分な知識をもっていなかったエバはこのような誘惑にさらされた時、サタンの策略に陥ってしまいました。

そして同じように、神の知識と誠実さがいかに偉大であるかを理解していなかったアダムも、誘惑されることになります。サタンはこのチャンスを逃さずに利用しました。その戦略は慎重に練られていました。それが成功すれば、人類は神より委任された執政者としての資格を失い、サタンはかつての領域の支配権を取り戻すことになります。

また、人類はサタンとその天使たちと同じ、あるいは少なくとも類似した状況に置かれることになります：つまり神の恵みから落ちてしまい、神の裁きに服することになります。

³⁴ 何千年にもわたる技術開発の積み重ねは、客観的に見れば、物理的宇宙に対する我々の厳しい限界の認識を強めるだけである（宇宙飛行のやや些細な成果を称賛する人間の傲慢な傾向にもかかわらず）。精神的な面では、私たちのテクノロジーはこの壁を少しも突破できていない（できない）のである。

す。これは悪魔にとっては完璧な計画に見えたに違いありませんが、その傲慢さゆえに、自分の行動が、どのような結果を招くことになるか全く理解できていなかったのでしょう。

結局、サタンは、神ご自身が人間性を身にまとい、悪魔とその追従者たちの支配から世界を取り戻すという、神の恵みに満ちた人類救済計画を始動させることになったのです。サタンは、(アダムとエバを通して提供された)神の最後のオリーブの枝を理解できなかったように、完全な知恵ある神が、サタンの一挙手一投足を予測していたことにも気づいていませんでした。

2. 墮落: イエス・キリストを信じる者にとって、悪魔がエバを誘惑した方法を理解することは非常に重要です。なぜなら、常に悪魔の攻撃の背後には、悪魔がエバを騙すために使った策略と同じもの:つまり真理の歪曲があるからです。

真理は、クリスチャンにとって最も重要な事です(ヨハネの福音書 8 章 32 節)。真理は私たちのすべてであり、真理は私たちがここにいる理由です。私たちの神は真理の神であり(詩篇 31 篇 5 節)、私たちは真理によって神を礼拝するのです(ヨハネ 4 章 24 節)。真理への信仰がなければ、私たちは神を喜ばせることができず(ヘブル 11 章 6 節)、神の真理に耳を傾けることによってのみ、私たちは神に近づき、効果的に仕えることができます(ゼカリヤ 1 章 3-4 節、マラキ 3 章 7 節、ヤコブ 4 章 8 節)。

神の言葉は真理です(ヨハネ 14 章 6 節; ヨハネ 1 章 1 節, 14 節, 17 章 17 節も参照)。神の言(ヨハネ 1 章 1 節)であるイエスが常に強調していたのは神の言葉であり(ヨハネ 18 章 37 節後半)、私たちが、書かれた言葉を通して生きた言葉を受け入れ、忠誠を誓うことによってのみ、私たちは「信者」(ヤコブ 1 章 18 節)、つまり神が語る真理を受け入れ、それに応答する者とさえなるのです。

真理の第一原理は、イエス・キリストです(ヨハネ 14 章 6 節)。私たちがイエス・キリストを受け入れ、父と御霊がイエス・キリストについて語る真理を受け入れると(ヨハネ 14 章 16-17 節)、私たちはイエス・キリストについて、イエス・キリストが私たちに何を語られ、私たちに何を望まれるかを学ぶ人生に入ります(第一テモテ 2 章 4 節)。

主から発せられるものはすべて真理であり、その代表例が、実際に「真理」<そのもの>である神の御子です(ヨハネ 17 章 17 節)。私たちのクリスチャン生活には、非常に多くの問題、活動、決断、テスト、試練がありますが、クリスチャンとしての私たちの行動や存在のすべての中心にあるのは、神から来る真理です。

私たちが神の真理を受け入れ、それを学び、それを信じ、それを試し、それに頼り、それによって生き、そのために死ぬ準備ができている限り、私たちは前進し、成長し、神を敬うことになります。なぜなら、神の真理を離れては、私たちは何をすべきか、どのようにすべきかさえ分からないからです。どんな行動も、どんな考えも、私たちの口から出るどんな言葉も、神の真理を知り、それを信じ、それに献身することなしには、正しいもの、真実のものとはなりません。

わたしは彼らに御言を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではないからです。わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではありません。**真理によって**彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。また彼らが**真理によって**聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします。(ヨハネ 17 章 14-19 節)

神の真理は「神の言葉、真理の言葉」(ヨハネ 17 章 17 節; ヘブル 4 章 12 節)である聖書の中にあり、どこに行けば真理を見つけることができるかがわかっています。

アダムとエバは聖書を持っていませんでしたが、代わりに主なる神ご自身から個人的な教えを受けました(受肉前のキリストの啓示)。³⁵ このことは、興味深い重要なポイントをもたらします。アダムとエバに関する一連のケースは、信仰や霊的成熟の欠如は、神の真理の差し出され方とは全く関係がないことを、明らかに証明する一つです。

どんな幻でも、しるしでも、夢でも、天啓でも、神ご自身の個人的な出現でも、第三の天への携挙でも、実際には、その形の違いだけで、不信仰を信仰に変える役割を果たすものではありません。

ダマスコへの道に行くパウロのように決して反応しなかったであろう何百万人、何十億人もの失われた魂がいるのです(主の初降臨の際に主を直接拒絶した大勢の人々や、神の強力な奇跡の数々を直接見た出エジプト世代の人達の反抗的な行動が証明しています)。

不信仰の硬い心は、人間が知っているどんなものよりも難攻不落です。しかし、神は公正で、忠実で、憐れみ深い方であり、神を真に求めようとする者にどのような方法や手段が届くかをよくご存知です。

³⁵ 「聖書の基本」の第1回「神学：神について」のII.C項「旧約聖書における三位一体」を参照下さい。

主がエデンに現れて命令を伝えても、最初の両親が罪を犯すのを防ぐことはできませんでした。また、主が肉体を持って来られたときも、主の教えはしばしば拒絶されました(主は、最も忠実な弟子以外のすべての人から拒絶された経験があります。ヨハネ 1 章 11 節; 6 章 60 節; 6 章 66 節)。同様に、自分の信仰の欠如を、神の真理が現在「包装」されている形のせいにして、聖書が神の靈感を受けた言葉ではないと(無知にも)思い込んでいる人がたくさんいます。

不信仰は常に言い訳を見つけ(イエスの時代もそうでした)、悪魔は(園でやったように)常に神と神の御言葉に対する信頼の欠如を利用します。アダムとエバを攻撃したサタンの戦略の本質は、当時も今も変わりません。それは、信者(あるいは信者になる可能性のある人)と真理の間に、欺きのくさびを打ち込むことです。³⁶

人とその妻とは、ふたりとも裸であつたが、恥ずかしいとは思わなかった。さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であつた。(創世記 2 章 25 節, 3 章 1 節前半)

ヘブル語の「アルム ערום」は、「狡猾(英語では shrewd 抜け目がない)」と訳されていますが、英語にするのはとても難しい言葉です。この言葉は、性格の複雑さを意味しており、それは称賛的な意味(「慎重な、注意深い、周到な」と軽蔑的な意味(「狡猾な、策略的な、ずる賢い」)の両方を含んでいます。

欽定訳は、ある意味では、良い訳をしていて「subtle(繊細な/狡猾な)」を使っており、この言葉は人格に関して「深く複雑な」という意味を、肯定的にも否定的にも捉えることができる数少ない英語の形容詞の一つです。

さて、これは創世記 3 章 1 節の解釈において非常に重要な問題です。蛇は、地球上の他のすべての生物と同様に、主なる神の創造物の一つでした(創世記 1 章 24-25 節)。呪われて腹這いになる前のその姿を確かめることはできませんが、一つだけ確かなことは、そのような生き物が主権者である人間を誘惑して罪を犯させることはできなかったし、興味を持たせることもなかったということです(創世記 1 章 26, 28 節参照)。

³⁶ 墮落の際のサタンの攻撃方法については、ペテロ#27 を参照してください。

「Subtle(繊細な/狡猾な)」とか「shrewd(抜け目がない)」という言葉は、動物的な性格を表していますが、同時に蛇に生来の悪意があるとは言えません。蛇がしたことは、悪魔に支配され、仕向けられてしたことなのです。しかし、この有名な聖句の中には、釈義では見落とされがちな重要なポイントがあります。

創世記 2 章の最後の節は、3 章の冒頭の節と密接につながっており、「裸」と「狡猾な」の間のしゃれ言葉(すなわち、「arom アロム」と「arum アルム」の間のしゃれ：ヘブル語ではほとんど同じ)は、非常に意図的なつながりと対比の役割を果たしています。

アダムとエバは裸であり、あまりにも純真であったため、人間の慣習の中で最も基本的なものである衣服の着用の必要性を認識していませんでした。禁断の木の実を食べる前の最初の両親は、善と悪の違いを認識することも理解することもありませんでした。見たもの、触ったもの、経験したものがすべて**善であった**からです。

確かに、彼らは裸でいることを恥ずかしいとは思っていませんでしたし、恥というものを知りませんでした。動物の世界では、最初の両親(アダムとエバ)と最も対照的な野生の生き物は蛇でした。用心深く、慎重で、恥ずかしがり屋の彼の行動は、アダムとエバの無邪気で率直な行動とは全く異なっていました。

もちろん、これは動物の行動であり、私たちとは全く異なる種の行動ですが、私たち(そして最初の両親)は観察したものをよく擬人化して表現します(ペットの猫や犬に明らかな「個性」を認めるように)。アダムとエバが、墮落前の生き物が発した言葉を理解できたのであれば、動物たちを個性ある存在として捉えていたとしても不思議ではないでしょう。(そしてエバは、蛇に話しかけられても全く驚いた様子もありませんでした)。

蛇を「繊細」または「抜け目がない」と呼ぶことで、聖書は、アダムとエバの「裸の無邪気さ」とは対照的に、蛇の「世俗さ」に注意を向けさせていますが、同時に、蛇が本質的に悪い存在であるとは書かれていません(墮落前のアダムとエバにとっては、確かにそうではありませんでした)。

蛇はサタンの攻撃対象として最適であり、そのユニークさゆえに最初の両親にとって非常に身近な生き物であったようです。しかも、その「個性」には、慎重な「知恵」が宿っていたので、悪魔が嘘を広めるために求めていた口火を切ることができたのです。

へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」。(創世記 3 章 1 節後半)

これは「バラムのロバ」のような状況とは異なります(民数記 22 章 28-30 節参照)。この節とそれに続く節には、エバと蛇の間の何気ない会話が描かれています。つまり、めったにないことではなかったのです(バラムがロバに声をかけられたのとは対照的です)。最初の女性は、蛇が自分に話しかけてきたことに驚きもしません、これが二人の最初の会話ではないことは明らかです。

蛇は、アダムとエバにとって「特別な関係」を持つ生き物であり、サタンにとっては、最初の両親を攻撃するための手先として、(その体に取り憑くことは)当然の選択でした。

聖書の最初の書において悪魔が蛇と同一視されていることは、その最後の書<黙示録>において最も明確に示されています。

この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年**を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。**

(黙示録 12 章 9 節)

しかし、エバの注意を引いたであろうものは、誰が話しているかではなく、何が話されているかでした。なぜなら、蛇の質問には、何かしっくりこないいくつかの微妙な兆候が含まれていたからです。

- ・蛇は「主なる神」を「神」と呼び、その権威を微妙に低下させ、自分のレベルにまで引き下げようとしています(創世記 3 章 8,9,13,14 節参照)。

- ・蛇は、主なる神が彼女に何かを禁止させていることに驚きを示し、主なる神が彼女から望ましい何かを不当に奪ったことをさりげなく示唆します。

- ・蛇は、主なる神がアダムに実際告げたこととは、違ったことを言いました(創世記 2 章 16-17 節)。

この最後の点は、最も巧妙です。一般的に、悪魔の攻撃は神の真実を歪曲することに重点が置かれます。サタンは、明らかに今までとは違ったことをエバの頭の中に植え付けようとはしませんでした。サタンの戦略はもっと巧妙なものでした。サタンは、最初の両親の鎧の中に弱点を見つけ、神の非常に明確な禁止事項を変えて述べることによって、その弱点を探っていたのです。エバが蛇の疑い深い見解に同意していた

ら、悪魔のほうが驚いたことでしょう。また、悪魔はエバがこの問題について無知であるとは思ってはいませんでした。それどころか、サタンはエバが見当違いなことを言う自分のペットを**教え諭す**だろうと思っていました(「神は本当に、庭の**どの木**からも食べてはいけないとおっしゃったのですか」)。このように言い寄ることによって二つの利が生じます:

1) 最初の女性<エバ>を長期間にわたって観察した結果、悪魔は何らかの陽動作戦が必要であることがわかりました。そうでなければ、自分のペットが、アダムや自分と同じくらい、自我を持つ同等の動物として行動したり話したりするという奇妙なことをすると、エバの疑念を招くに違いありません(これは何としても避けなければなりません)。一見、無邪気に見える蛇のこの質問は、間違いを正してくれることを嘆願さえしているのです。蛇は勘違いをしていました。なんてひどく間違ったことを考えているのでしょうか。蛇は、最初の夫婦が園の多くの木から食べているのを何年も前から見ていたのに、蛇は、なんてひどい勘違いをしているのでしょうかとエバは思ったことでしょう。確かに、彼女は自分の小さなペットが悪魔に乗っ取られているとは思っていませんでしたが、その質問はどうしようもないほど外れたものでした。しかし、サタンは、この弱い生き物を諭して「教えてあげたい」というエバの自然な衝動、言ってみれば母性本能がくすぐられるなら、疑惑に駆られたとしても彼女は会話に引き込まれるだろうと見抜いていたのです。

2) サタンは、主なる神の命令に対するエバの理解が不明確であることも観察していました。主の命令に、「そして、それに触れてはならない」という「おまけ」をつけたのは、おそらくアダムである可能性が高いでしょう。アダムは、エバが創られる前に、主の命令を受けていたのですから(創世記 2 章 15-18 節)。ここには、重要な禁止事項を強調したいというアダムの自然な衝動(父性本能とでも言うべきか)が見られます。しかし、この不明確な表現は、サタンにチャンスを与えてしまいました。悪魔はエバをこの会話に引き込むことに成功した後、エバが神の言われたことについてどんな理解の欠如があるかがわかれば、自分が必要とする力を得ることができると確信したのです。エバがある一点について神に疑問を持ち始めた途端、神が命じたすべてのことが解釈次第となり、気まぐれな態度をとるだろうということをサタンは知っていたのです。

エバに対する悪魔の策略を、現代の私たちが理解することは非常に重要です。なぜなら、悪魔の戦略は基本的に同じだからです。まず、私たちを「対話」に巻き込み、言葉やその他の方法で、私たちのエゴや傲慢さを引き出すような微妙な誘惑をします。次に、この悪魔との戯れを利用して、神の言葉、神の命令、神のご性格のどこか

に些細な疑問の影を投げかけます。そして最後に、私たちの信仰の盾に不信感の亀裂が入り、信じられなくなると、その亀裂に合う楔を打ち込むのです。

私たちのクリスチャンとしての経験は、神の御子イエス・キリストの人格を通した神への最初の、そして変わらぬ信仰、信頼、確信に基づいており、それは書かれた言葉である聖句に表現されています。サタンは、私たちをこの信仰から引き離そうと常に待ち構えており、そのための最も効果的な方法は、エバへの攻撃にはっきりと見ることができます。聖書の最初の複数の書物(五書または律法)と最後の書物の両方で、聖書から何かを除くことだけでなく、何かを加えることについても厳しく警告されているのは偶然ではありません(申命記 4 章 2 節、黙示録 22 章 18 節)。重要な真実を省くことも、真実でないものを加えることも、悪魔の手です。悪魔は、私たちに一つの点で妥協させることができれば、どこまでも墮落させることが可能になるからです。

女はへびに言った、「わたしたちは園の木の実を食べることはいます…
(創世記 3 章 2 節)

もし、エバがここで会話を止めていたら、人類の歴史の流れは大きく変わっていたでしょう。しかし、エバは蛇の誤った発言を正すだけでは満足しませんでした。(彼女は質問を受けた時点で止めているべきでしたが)そのかわりに、この質問が皮切りとなり、議論に引き込まれてしまったのです。

サタンが注意深く計画した集中猛攻撃は、エバに善悪の知識の木に関する神の戒めについて注意を向けさせ、議論を始めさせること(同時に、エバに疑念を抱かせること)が目的でした。エバは、自分のペットの誤解を正した後、神の命令を自分自身がよく理解していないことは明らかなことでしたが、それを説明し続けていました。(サタンはよく知っていたに違いありません)。

なお、動物である蛇は、この禁止事項を知る必要は全くありませんでした。「食べてはいけない」という命令は、神から人だけに向けられたものだったのです。エバが蛇に必要なでもない説明をし続けていた時、エバの心の奥底では何らかの警告を聞いていたはずですが、聖書の記述から明らかなように、誘惑にいったん扉を開いてしまうと、抜け出せないものになってしまうのです。

ただ園の中央にある木の实については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。(創世記 3 章 3 節)

エバは蛇に神が言ったこと、言わなかったことを教えようとしますが、残念なことに、エバはペットに倣って、主なる神(創世記 3 章 8,9,13,14 節で使われている神の名前)を、馴れ馴れしく「神」と呼んでしまいます。馴れ合いはしばしば軽蔑を生み、このエチケツト違反によって生じた敬意の欠如は、エバに大きな犠牲を強いることになりました。

私たちがクリスチャンとして、関わるすべての人との接触において常に神を聖なる者とし神の名と人格を尊重し、神に栄光を帰し、神を信頼し、神に望みを置いていることを言葉だけでなく行動でも証しすること)を決意する時は、悪魔からの挑戦を受けることは当然なことです(民数記 20 章 12 節、マタイ 6 章 9 節参照)。話す相手の主に対する低い評価に合わせるのは、楽なことで、蛇が主なる神への敬意を欠いていたのに、エバは、蛇を叱責せずに、彼のレベルにまで下がってしまいました。

人と調和することは、他とコミュニケーションするために良いものとなりますが、しかし神の真実が関わる場合、妥協すべきではありません。エバは、ここである原則が攻撃されていることに気がつきませんでした。それは、主なる神の尊厳の原則であり、それゆえの神の権威の原則です。サタンがこの面でエバに違反させたら、彼の勝利は遠くありませんでした。この最も困難な試練を乗り越えるために、エバは神に対する健全な恐れを持っているべきでした。悪魔の巧妙な攻撃の前にまずエバが、自分は神と「多かれ少なかれ」対等な関係にあると感じさせる必要がありました。このような傲慢さは愚かさの極みであり、以来、どの世代においても、多くの信仰の危機の原因となっています。

主を恐れることは知識のはじめである(箴言 1 章 7 節)

皮肉なことに、アダムとエバは、自分たちが従っていた(「木から取って食べてはいけない」という知恵の原則に対して不従順となり、その後でそれが本当に間違った決断だったと「知る」ことになった<知識を得た>のです。

蛇の教師であるエバは、特に教える下準備をしていたわけではありませんでした。まず、主の命令(木に触ってはいけないというアダムの付け足した「おまけ」)に加えて、次のようなことをしました。蛇が主を尊敬していないことになって、主を「主なる神」ではなく「神」と呼んでいました。そして、三つ目の決定的な間違いは、エバが生と死の重要な問題を把握していなかったことです。

エバは、善悪を知る木を本来の名前ではなく、「園の中央にある木」(創世記 3 章 3 節)と呼びました。これは、「善悪の知識」についての警告を省いただけでなく、エバとアダムが日々の糧を得るための生命の源を軽んじることになる、あいまいな呼称でし

た。実は、庭の中央には二本の木があったのです(創世記 2 章 9 節)。もう一本の木は、もちろん、創世記 2 章 9 節で名前が挙げられている最初の木、命の木のことでした。この最初の木は、善悪の知識の木の真向かいにあり、最初の両親にとって明らかにしるしやシンボルの役割も果たしていました。

それは、足りないものが何もない彼らの祝福された生活が、この最初の実を食べ続けて他の実を食べるのを避けることにかかっていることを、毎日、目で見、具体的に示されていたのです。彼らの生活を支え、維持し、豊かにする果実を持つ命の木は、庭の中央にあり、神によって食べることが禁じられていませんでした。一方、もう一本の木は、その実を食べれば確実に死に至る木であり、神である主ご自身がその禁止事項と結果を明確にして禁止していました。

この二本の木をエデンの中で対面させることで、神は生と死の問題をわかりやすい形で説明してくれていたのです。つまり、まず命の木から離れなければ、死をもたらす善悪の知識の木に向き合うことはできないのです。

へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。(創世記 3 章 4-5 節)

蛇がこのように大きく矛盾したことを言うと、エバは教師から生徒に早変わりしてしまいます。慌てて蛇を正そうとしていた(そして、これまで見てきたように、エバの蛇を正そうという試みは失敗していました)エバは、今度はこの矛盾した話を飲み込もうとしているのです。このようなエバの立場の逆転には、エバが真実に対して絶対的な信頼を持っていたわけではなく、彼女の感情に基づいた信念が基本的に脆いものであったことがわかります。

エバが、善悪を知る木について主なる神が言われたことに揺るぎない信仰を持っていなかったことは、神の真実に代えて蛇の嘘を受け入れようとしたことから明らかです。多くの解説者が指摘しているように、サタンがエバの自我に訴えてエバの決意をくじいたことは確かであり、その誘惑の方法は欺瞞的であり、非常に効果的でした。

しかし、もしエバが神の言われたことを本当に**信じて**いたならば、主の言葉に真っ向から反する極悪非道な言葉を信じる気になることもなかったことでしょう。

何度か述べたように、嘘を受け入れるようになるには、まず真実が拒絶されなければならないというのが、神によって考案され構築された人間の精神の基本原理です。エバは、蛇の指導者になろうとしたのですが、神を意識せず、自分を意識してしま

た。具体的には、(不適格で欠陥のある)自分の知識を誇示していました。その結果、蛇が不意に彼女の立場に挑戦してきた時、彼女は簡単に揺らいでしまいます。なぜなら、彼女は神の真理の信仰にしっかりと基づいているのではなく、自分のエゴからくる感情によって動かされる偽りの自信に基づいていたからです。

さらに、彼女の立場は感情と偽りの情報に基づいているので、この挑戦に対して防御するための論理的基盤がありません。ソクラテス哲学の学者らや裁判における弁護士のように、蛇はエバを論議の袋小路へと導きました。自信を失い、神の戒めに対する確信が揺らいでいることが露呈したことで、彼女は蛇の口から吐き出される嘘を受け入れるようになってしまったのです。

(蛇の姿を装った)悪魔は、エバの強がり揺らぎ出した時、機を逃さずに攻撃をかけました。悪魔は、道徳的な弱さが露呈する時(この場合のように神とその御言葉に無頓着な時)によくするように、真っ向から攻撃を仕掛けました。禁断の実を食べても、エバとその夫は「死なない」というのは、全くの嘘でした。実際には、不従順は即座の**霊的な死**(神からの非難と疎外)を意味し、最終的には**肉体的な死**(衰退のプロセスが始まる)、そして(神ご自身による驚くべき恵みの介入がない限り、この時点でサタンでさえもその可能性を知らなかったと思われる)究極の**永遠の死**を意味しました。肉体的な死が、最初のカップルが果実を食べた後、すぐには訪れることはなかったけれども、それは不可避なことでしたので、悪魔が言ったことには一片の真実もありませんでした。どのような観点から見ても、これはほとんどない嘘であり、事実上、最初の男女を容赦なく殺害することを意味していたのです(ヨハネによる福音書 8 章 44 節)。

実際、サタンの嘘はあまりにも大胆で、エバは**それが真実ではないと信じる事ができませんでした**。いわゆる「大嘘」という現象は、人類の歴史の中で何度も繰り返されてきたものです。明白な真実に反するような、あまりにも大胆で、あまりにも非道な主張や虚偽は、しばしば人間の心の奥底に潜在する強力な傲慢さをかき立てることができます。なぜなら、私たちは本能的に、もし真実そのものが破壊され否定されるのであれば、私たちの行く手を阻むものは何もない、天の門を打ち破ることができる(この世の支配者と一緒になって、宇宙の支配者を失脚させることができる)と思ってしまう傾向があるからです。

しかし、これはもちろん不可能な「もしも」の話であり、心の中の暗い場所に理性を麻痺させる傲慢さの波が脈打っているようにも、世界共通の言い回しであろうと、今ここでの単純な発言であろうと、真実は常に堅く立ち、嘘は常に否認され、敗北する運命にあるのです。

「食べても死ぬことはない」という不服従への免責の可能性は、エバを神の擁護者から好奇心旺盛な聞き手へと一気に変貌させてしまいます。神への熱意は急速に失われ、彼女は悪魔に発言権を与えることを厭わなくなります(ローマ 10 章 2 節)。そして、この嘘:禁断の実を食べさえすれば、「神のようになれる」という言葉を聞いた後、彼女は敵対者への聞き手、そして<へびの>弟子へと変貌を遂げるのです。³⁷

女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。(創世記 3 章 6 節)

はじめ、エバは自分が蛇を教えたように、その実は食べずに、善悪を知る木を見つめています。これは彼女にとっては不運なことでした。なぜなら、(単に実を支えているだけの)木に注目していると、その実を食べることが禁じられているという重要な問題が見えなくなってしまうからです。

実をならせる木には触れないということは、重要なことではありませんでした。善悪の知識の木は、木としては園内の他の木とよく似ていましたが、そのことがエバの心を揺さぶりました。この木を、より大きなカテゴリーの中の一つに過ぎないと考えすることは、彼女がまだ持っている健全な恐怖心を取り除いてしまいました。

実よりも実を実らせているものに注目していたエバは、結果的に食べることになったのです。触れることは偶発的なことであり、それは「取って食べる」ことよりもはるかに何気なく起こってしまうことであることは確かです。もし、最初から「食べる」という行為が境界線になっていたら、エバはあえてその一線を越えて<取って食べるという>行動に移すことは、躊躇し、考え直すことさえしたかもしれません。

しかし、主なる神の命令を誤って理解していたために、彼女の心の中の境界線は、あてにならない、ほとんど気ままな「触っちゃダメ」というものになっていました。熱いストープに対するように、身を傾けて指先でそっと木に触れる姿が目には浮かびます。この簡単な偽りの境界線が破られてしまえば、エバは実を食べても、それ以上の影響はないと安心したに違いありません。

エバが神の言葉を誤って理解した結果、善悪を知る木を気をつけなければならない特別なものとしてではなく、<「中央にある木」という>分類の中の一つにすぎないこととしてしまったことと、心の中で違反の障壁を低くしてしまったことの二点があっても、もしエバがまだ神への恐れを失っていなければ、どちらの事態も大きな影響を及ぼさなかったと言わなければなりません。

³⁷ ヘブル語の「神」(ʾelohiym, אֱלֹהִים)は、厳密に言えば複数形で、神だけでなく「神々」の意味もあります(民数記 25:2 など参照)。

エバのケースで起こったことは、その後のエバの子供たちすべてのパターンとなっていくので、とても重要なことです。無知、自己満足、欲望が相まって、私たちを罪へと導くことはよくありますが、＜園での＞墮落では確かにそれが起こりました。

エバは、神が言われたことをあまり知らず、神に従わなかった場合の結果についても真剣に受け止めていなかったため、悪魔の攻撃に対抗するための信仰の盾が非常に弱かったのです。不確かな知識を問われ、結果が出ないことを保証されたとき、「神のようになる」という見通しは、彼女の欲望に火をつけ、彼女の乏しい防御力を奪うには十分すぎるほどの誘惑でした。

これは、悪魔の常套手段です。私たちの鎧の隙間、神の言葉に対する無知、不信、疑問、キリストの足跡をたどることへの無頓着さ(全体的に、あるいは特定の点について)を観察し、この重要な「偵察レポート」を武器に、偽りの情報、偽りの保証を提供して攻撃し、私たちが最も弱い時、弱い場所で私たちを誘惑するのです(あるいは脅かします)。

悪魔はアダムの「弱み」も知っていました。サタンは、エバが完璧な人生を、空虚な約束と虚しい希望のために捨てるように仕向ける最もうまいやり口を見抜いていたように、アダムの主な弱点も鋭く観察していました。

アダムの最も脆い急所は何だったかという、エバです。恋する男たちは、何千年もの間、自分の愛情の対象に向けて詩を書いてきましたが、人類史上最初の詩は、主なる神がアダムに妻を紹介してくれたときに、アダムが書いたものであることは、あまり覚えられていません：

そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。(創世記 2 章 23 節)

ヘブル語の詩的な表現であるこの連句は、アダムがこの魅惑的な新しい生き物に対して抱いた熱意を、うまく表しています。この詩の美しさ、シンプルさ、機知に富んだ内容は、英語に翻訳してもなかなか表現しきれません。

例えば、アダムが「女」(イシャー: אִשָּׁה)と名付けたのは、「男」(イシ: אִישׁ)という言葉に女性的な語尾を付けたエレガントな言葉の洒落(しゃれ)です。アダムは、神に「ありがとう」と言い、女に「こんにちは」と言うだけではなく、この晴れ舞台のために、自分の言葉の才能を駆使して、全く新しい表現方法(詩)を生み出し、その全く新しいジャンルの精巧で優美な最初の作品を、私たちに提供してくれたのです。

明らかに、エバは彼を刺激しました。私たちの民族の歴史の中で行われたすべての結婚の中で、新郎新婦がお互いに「完璧にマッチしていた」と言えるのは、この結婚だけです(なぜなら、神ご自身が引き合わせ、新郎のために特別に新婦を作ったからです:第一コリント 11 章 9 節参照)。

ハネムーンの場所として、エデンの園以上に完璧な場所はありません。エバとアダムは、完璧な場所に住んでいただけでなく、自分自身も完璧で、恨みや分裂、疎遠になる原因はありませんでした:ただ一つの例外は、善悪の知識の木でした。

アダムが園の中心に戻ってきた時(エデンの動植物を観察し、分類して楽しんだ後)、愛する女性との至福の再会を楽しみにしていましたが、その期待は裏切られました。聖書にはエバと会った時の場面は記されていませんが、アダムはエデンの様子がおかしいことにすぐに気付いたことでしょう。

エデンの世界で唯一の「トラブル」(これまで経験したことの無い事)の原因となりうる事は、禁断の実をエバが食べる事だったので、その事を、アダムは、その優れた知性ですぐに察知したことは確かです。

禁断の実を食べて、エバは一瞬にして霊的に死んだ状態になり、避けられない肉体の退化が始まり、神の慈悲深い介入がない限り、永遠に神の死の宣告を受ける運命にあったのです。彼女の**体**に顕著な変化が起こってしまったということにアダムが気づいたかどうかは定かではありませんが、彼女の**振舞い**が大きく変わっていたことは確かでしょう。

彼女はもはや完璧ではありませんでしたし、彼女もそれを知っていました。彼女は今や死すべき存在であり、死は避けられないことを知っていました。彼女は自分が、完全に騙され、神と神の命から疎外されてしまったことを知ったのです。罪人となってしまったことによってもたらされたすべての恐怖と戦慄に対して、彼女の目は開かれました。エバは深刻な問題を抱え、罪悪感に苛まれ、ひどい恐怖に襲われていました。アダムが帰ってきた時のエバの状態は、途方もないものでした。

墮落におけるアダムの役割について聖書が言っているのは、エバが「[実の一部を]共にいた夫にも与えたので、彼も食べた」ということです。この二つの短い前置詞<英語で「to her husband with her」の「with 共にいた」と「to にも」のこと>が、アダムが帰宅後に遭遇した、危機的状況に対する反応を物語っています。

聖書によると、アダムは食べたらどうなってしまうかということについて、知らずに欺かれて禁断の実を食べてしまったのではないことは明らかです(第一テモテ 2 章 14 節)。

アダムは、妻の手から禁断の実を取って、妻と同じように食べれば、自分も三つの死を遂げることになることをよく知っていました。アダムは、自分の人生の最愛の人、完璧な魂の伴侶が、泣き崩れていて、彼女から樂園の光が失われていくのを目の当たりにして、難しい決断を迫られました。

自分を完全なものにしてくれた唯一の人、自分の肉と骨をどうやって捨てることができるだろうか？ 彼女は哀れで、絶望的で、切実に必要を抱えていました。そんな彼女に背を向けて去っていくことができるでしょうか？ 彼女の「共にいた夫にも」という二つの言葉からも、自分は「彼女の夫」であり、「彼女と共に」いようというのが、アダムの基本的な考えであったことは十分に明らかです。

アダムは墮落した妻を見ても逃げませんでしたし、しばらくの間、妻から離れて考えようとしませんでした。神に相談することはありませんでした。アダムは、深く愛したこの女性に対する思いやりから、彼女のそばにいて、彼女を慰め、彼女の話聞き、彼女に屈して、その実を食べたのです。

アダムはいじめられたのではなく、怒られたのでもなく、騙されたのでもありません。エバのいない人生は考えられず、エバを助けたいと心を痛めながら、「エバと一緒に」運命を共にし、エバと死を共にしたのです。

アダムの決断のロマンチックで崇高な側面は、私たちを奮い立たせるべきものではありません。アダムもエバと同じように間違っていました。それどころか、自分が何をしているかをよく知っていたので、彼の行為はより罪深いものでした。

私たちの最初の両親は、二人とも神を裏切りました(エバは無知で、アダムはわかっていました)。そして、二人とも本質的に同じ理由で、神を信じ信頼することはしなかったのです。エバは神の言われたことの本意と内容について騙され、アダムは神を信頼せず、エバを創造することができた神にとって、その困難な状況においてもなんとかして下さると信じるができなかったのです。

もし、アダムが自分だけでエバの問題を解決しようとせず、もし主を待つことをしていたら「どうなっていたか」「どうなっていたかもしれないか」はわかりませんが、聖書全体を参考にして、確実に言えることは、「神に不可能なことはない」ということです(参照:

創世記 18 章 14 節, ヨブ記 42 章 2 節, エレミヤ 32 章 17 節, マタイ 19 章 26 節, ルカ 1 章 37 節; 18 章 27 節)。

このように最初の人間アダムは、自分の罪深さを神が「容認して」くれるかもしれないと思うことで、最初に悪魔が陥ったのと全く同じ傲慢の罟、偽りの保障、つまり自分を取り替えられることなどない存在だという思上がりに、足を踏み入れてしまったのです。³⁸

最初の両親の失敗に注意を払うことは当然ですが、私たちの誰もが同じようなことをしたであろうことを認め、理解することも大切です。エバは人類で初めて誘惑を経験した人物であり、悪魔がエバに仕掛けた攻撃は、悪魔の「最高の策略」と言えるでしょう。

サタンやその手口をよく知っている現在の私たちは、もっとうまくできたかもしれませんが、エバも私たちの立場であったら、もっと注意を払えたことでしょう。しかし、悪魔とその策略について全く知らない場合、あえてこの巧妙な攻撃に屈しない人が果たしているでしょうか。

アダムの立場に立ってみるなら、それは私たちにとっても非常に難しいことです。エバが墮落した時にアダムが失ったのは、自分のために完璧にデザインされた完璧な関係、完璧な人でした。それを失ったアダムが、どのような状況に置かれたかは想像もつきませんし、私たちもほぼ間違いなくアダムと同じような反応をしたであろうことを認めてもよいでしょう。

最初のアダムは、サタンの多大な欺瞞に直面して失敗し、それ以来、彼の子孫はすべて(一人の例外を除いて)この疑わしい遺産を引き継いでいますが、最後のアダム<イエス>は、悪魔の誘惑にどう立ち向かうかについて、私たちに感動的な例を残して下さいました。

キリストは、楽園ではなく、四十日間の断食明けの砂漠で、サタンの誘惑に遭遇しました。サタンがキリストを三度にわたって行った誘惑は、最高に手の込んだものであり、キリストだけがそれに耐えることができるものでした。ここで私たちは、キリストがどのようにそれに耐えられたかに注目すべきでしょう。神の子であり、神の言葉そのものであるキリストは、神の言葉という盾をもって悪魔の攻撃に対抗し、神の言葉でサタンの言葉に反論したのです。聖書が何を言い、何を意味しているのかを学ぶことの重要性(クリスチャンの霊的成長の、信仰と共に基礎となるもの)について、主が私たちに残して下さいた例以上の説明はありません。

³⁸ 本シリーズの第 1 回「サタンの反逆と墮落」を参照。

聖句によって悪魔の巧妙な誘惑はすべて嘘であることが明らかにされ、断罪されました(マタイ4章1-11節, マルコ1章12-13節, ルカ4章1-13節)。

1. 神の言葉から目をそらしてしまうという誘惑:

すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい」。イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある(申命記8章3節)。(マタイ4章3-4節)

キリストは四十日間食事をしていなかったのが空腹でしたが、確かに石をパンに変える力を持っていました。このような状況下で、そうすることを正当化して、自己弁護することはとても簡単なことであつたでしょう。しかし、主は聖霊によってこの試練に導かれていたので、イエスキリストがこの試練に耐えることは神の御心であり、サタン働きかけで突然終わらせるものではありませんでした(マタイ4章1節, マルコ1章12節, ルカ4章1節)。

この試練の大変なところ、本当に大変なところは、空腹ではありませんでした(もちろん私たちの誰にとっても、四十日間食べ物を与えられていなくて、突然食べる機会が訪れた時には、それを我慢するのは難しいことでしょう)。

キリストにとって、この誘惑が落とし穴となり得た部分は、「おまえが神の子 **であるというのなら**」という挑発でした。**本物の** 神の子なら、このような飢え方はしないし、神の力を使って必要を満たすことができ当然だという、悪魔の非難が見て取れます。

キリストは激しい空腹の時に狙われて悪魔に誘惑されましたが、本当の試練は、彼が飢えた状態であるという**事実**を使って、キリストを非難してきたことなのです。ここでのキリストの状況は、ヨブの状況と似ています。

ヨブを慰めに来た者たちは、ヨブの苦しみは自業自得ではなく、神の計画の一部であることを理解していませんでした(実際には、神の究極の賛辞だったのです)。彼ら

は、激しい苦しみは神に嫌われていること(罪の罰)のしるしに違いないと独善的に決めつけている人達でした。

彼らが来るまでサタンの手による最も激しい抑圧にも信仰を堅く保って耐えてきたヨブは、これらのかつて友人だった者たちの鋭い非難に、足をすくわれてしまったのです。サタンの「もしおまえが…なら」という非難は、ヨブに「お前のどこかがおかしいに違いない」と迫ったのと同じように、主の決意を覆(くつがえ)そうとするものでした。

しかし、主は、エバのように誘惑する者の言葉に気を取られたり、ヨブのように非難の言葉に気を揉(も)んだりせず、神の御言葉に思いを集中させました。イエスが引用した申命記 8 章 3 節は、(悪魔の挑戦に対するイエスの聖句をもって答えるその一つ一つがそうであるように)心を揺さぶられるものです。

イエスはサタンを相手にせず、自分の飢えも、神のひとり子としての真の地位に対する悪魔の挑戦をも問題にしませんでした。主は神に心をとめます。どのようにしてそうするのでしょうか？ 悪魔の嘘を鋭い剣のように切り裂く神の真理を、ひと言引用することによってです。

キリストの聖句の使い方は、彼が当時存在していた聖書(旧約聖書)の多く(すべてではないにしても)を記憶していたこと以上のものを証明しています。

キリストが適切で完璧な引用句を選んだことは、キリストがそれを**理解し、信じていた**ことを示しています。未信者でも聖句を暗記をすることはできます。信者にとってのみ、聖書は真の意味での力のある剣となり、その力は、信者が理解し、信じる程度に**しか**発揮されません。

悪魔に誘惑された時の主の対処は、私たちが従うべき完璧な模範です。キリストは神の御言葉を完璧に理解し、絶対的に信じていたので、この悪魔の「正しそうに聞こえる」欺きに反論することができたのです。

イエスは**聖書から**、神の言葉が他の何よりも、食べ物よりも大切であることを私たちに教えるために、時には窮乏や苦難に耐えることが神の御心であることを理解し、信じておられたからです。

(イエス様が引用された)申命記 8 章 3 節の文脈では、イスラエルの民が飢えを経験したのは、この一時的な窮乏を通して、神を信頼すること、すなわち、神が短い苦しみをもたらす理由が何であれ、神は自分たちの最善を求めておられることを学ぶためでした。

〈それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを持って、あなたを養われた。人はパンだけでは、生きず、人は主の口からでるすべてのことばによって、生きることをあなたに知らせるためであった。申命記 8 章 3 節〉

この聖句の引用は、主が、神の御言葉と神の御心を第一にすることは主にとっても必要なことで、究極の苦しみである十字架の苦しみにまでご自分を備え、「苦しみによって従順を学ぶ」必要を理解しておられたことを示しています(ヘブル 5 章 8 節; 2 章 18 節; 4 章 15 節; 11 章 26 節; 13 章 13 節参照)。

2. 神を試すという誘惑:

それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから(詩篇 91 篇 11-12 節)」。イエスは彼に言われた、『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある(申命記 6 章 16 節)」。 (マタイ 4 章 5-7 節)

サタンのキリストに対する第二の誘惑は、第一の誘惑とよく似ています。もう一度、サタンはキリストに「神の子」としての地位を証明するように挑み、キリストに不従順をさせようとしています。しかし、サタンは、今度は、キリストが特別な力を使って、(空腹を食べて満たすというような)、やって当然なことをするように仕向ける(キリストの場合は神の御心ではなかったのですべきではありませんでした)のではなく、普通の人とする危険なこと(つまり、飛び降りるようなことを)をして(父にキリストを救い出さなければならぬように追い込む)ことをさせているのです。

サタンの第二回目の誘惑は、第一回目の手法を巧妙に変えたただけではありません。悪魔はこの特別な矢を、明らかな聖句の裏付けを使って鋭くしています。天使の保護の約束が人間に適用されたとすれば、それは間違いなく私たちの主イエス・キリストに適用されたことでしょう(マタイ 26 章 53 節参照)。

実際、キリストがこれらの誘惑をうまく切り抜けた直後に、天使たちはキリストに奉仕しました(マタイ 4 章 11 節; マルコ 1 章 13 節)。神の子としての主の立場に対するこの挑戦は、より直接的であると同時に、より狡猾なものです。

悪魔のするようにと誘惑していることを行って、死を免れることができるのは、神の子だけです。完全な知識を持つキリストは、サタンが使った旧約聖書の聖句は、特にメシアには当然当てはまるものであることをよく知っていました。

主が飛び降りることに同意せず、拒むなら、(神とほんの一握りのキリストの心を理解している人達は例外として)ほとんどすべての人は、主は神の約束に対する信仰がないのだという**印象を持ってしまうかもしれません**。そのような思いに駆らせる誘惑は、あなたや私に向けられても何の意味もないことを理解してください。なぜなら、私たちは**その**<約束されていたメシアなる>神の子ではありませんし、イエスの場合は、メシアとしての完全な信仰があるかが試されていたからです。

キリストは、父が御自分が飛び降りてもケガをしないようにして下さること、また、天使の保護の約束が自分になされる事は**知って**おられました。<詩篇 91 篇 12 節>キリストは、彼が本当のメシアではないという悪魔のほめかしを、ただ飛び降りるだけで簡単に反論し証明することもできました。

悪魔は、イエスが本当に信じていることを「証明しろ」と迫っていました。そして、主にとってそうすることは簡単なことでしたが、救い主は、ご自分を任務のため使わされた方の名誉と栄光が危うくなっていたことを知っていました。(ヨハネの福音書 7 章 18 節; 8 章 50 節; 8 章 54 節)

生ける神のことば<イエス>は、十二歳で聖書を理解する神童であり(ルカ 2 章 41-52 節)、さらに二十年間、神の言葉を集中的に学ばれた結果、サタンが悪意を持って聖書を誤用することを許さない存在となられたのです。そうでなければなりませんでした。彼は地上での宣教期間中、数々の似たような冒瀆的な非難に遭遇しましたが、それは彼が通過しなければならない苦難を途中であきらめさせようとしているものでした。

おそらく、これらの中で(サタンの挑発によく似ていて)最も卑劣なことは、人々がイエス様を罵倒していた時ですが、イエス様は、その人々の罪のために十字架にかけられて死なれたのでした。

「もし神の子なら、…十字架からおりてこい」。(マタイ 27 章 40 節後半)

3. 神様以外の誰かや何かに忠誠を誓うという誘惑:

次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」。するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある(申命記 6 章 13 節)」。(マタイ 4 章 8-10 節)

「どんな人間も買収に弱い (人は金で動く)」とよく聞きます。確かに、私たちは誰でも、買収にのってしまいやすい欲望の領域や、圧力によってつぶれてしまう脆いところを持っています。前にも述べましたが、サタンは鋭い観察者であり、私たちに不利な情報を集めることに長けています(ヨブ記 1-2 章, 第一ペテロ 5 章 8 節参照)。

イエス・キリストは生身の人間でしたが、罪も弱さもなく、神の言葉の知識においても欠けているところがなかったので、サタンがイエス・キリストに関して情報収集しても、あまり隙を見つけることはできなかったことでしょう。しかし、悪魔は巧妙な戦略を立てました。それは普通、人が欲しがっても、手に入れることのできないもの、すなわち世界の支配者としての地位を主に提供することでした。

この申し出は魅力的なものに思えますが、どんな人間に対して以上にキリストに対して、これはうまい売り込み口上であったのです。なぜなら、キリストはこのために<王として>生まれてきたのです(ヨハネ 18 章 37 節)、それこそがキリストの生まれながらの権利であると宣言している聖書の言葉(例えば、詩篇 2 篇 8-9 節)を悪魔はよく知っていたからです。

今回の悪魔の「もし」は、キリストが神の子であるなら、ということに向けられたものではありません。今回は、その差し出されるものを受け取りたいなら、という意味であって、そのために要求される条件は、サタンを礼拝することでした。

祝福を受けるためには、サタンとその邪悪な世界システムに妥協して受け入れることが必須であると思わせるのは、悪魔の得意とするところです。全てのものの源である神を認めないなら、それはサタンの思うつぼであり、私たちはサタンに操られやすい存在となってしまいます。

しかしキリストは、主なる神のみが崇拝の対象であることを確信していました。祝福は、主なる神からしかもたらされないからです(申命 6 章 13 節)。

エバは神の言葉から目をそらし、悪魔の欺きに心を開いてしまいました(―誘惑 1)。アダムは罰を受ける前に、「何とか容赦してもらえるかもしれない」と期待して、エバに身を投じ、神を試すことになりました(誘惑―2)。二人とも祝福にしがみついたために、神だけに信頼することをしませんでした(エバの場合は禁じられていた実を食べなくても素晴らしい生活を持てること、アダムの場合には女がいなくても素晴らしい生活が与えられることを神に信頼するべきでした)。その代わりに、それぞれ、＜欲と＞罪に惹かれてサタンの罠にはまることになりました(誘惑―3)。

サタンがキリストに対して同じ類の誘惑を使ってうまくいかなかったのは、イエス様は神の御言葉を、どうしてもよいものとして軽んぜず、完全に理解して信じ、それに生きる真理として、彼の心の中に脈打っていたからです。

私たちが悪魔に対抗できるのは、主イエス・キリストの例に倣って、神の御言葉を心に刻み、それに耳を傾け、学び、理解し、信じ、信仰に立ってそれを行動に移すことによってだけです(ヤコブ 4 章 7 節)。

エバは十分に耳を傾けませんでした。アダムは耳を傾けましたが、十分に信じていませんでした。いざという時、二人とも悪魔の攻撃の圧力の下で、神への忠誠を維持するだけの信仰の強さがありませんでした。私たちが霊的に成長し、サタンの惑わしからより安全になるためには、神の御言葉を理解し、信仰によってそれに生きて、大切にしなければなりません。そうすることによってのみ、アダムとエバがしたようなつまずきを避けて、キリストのみ足の跡をたどることができるのです。

すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。(創世記 3 章 7 節)

アダムとエバの目が開かれたこと、つまり善と悪を突然理解したことは、大変なショックと失望でした。開かれた目で見えたものは、自分達が主なる神の命令に対して従わなかったこと、善いものを捨て、悪いものを受け入れてしまったことでした。

彼らの善悪の判断力は、彼らが罪を犯し、罪深い存在となってしまったゆえに、役立つものとなったのです。禁断の果実を食べたことで、彼らとその子孫は永遠に変わってしまいました。それまで完璧だった彼らの体は、先天的な罪による腐敗で汚されて

しまったのです。これから先、罪は常に「戸口に潜んでいる」(創世記 4 章 7 節)ので、人類が生き残るためには、罪であること、悪であること、善であること、正であることを見分ける能力が必要となったのです。

本質的に罪深い人間が、良心や罪の意識を持たないなら、種としての人類は存続することが不可能です。同様に、恥、悪の認識、後悔の様子(また神が警告しても、悔い改める可能性)がないことは、悲劇的なことです。

このように考えると、善悪の知識の木の存在は、(それから遠ざかることを選択することで)人間が神の方を自由意志で選ぶことができることを示していただけでなく、罪を犯した場合には、罪の世界の中で、罪を見分け、認識する能力を提供するという、最も恵み深い備えでもありました。

神との関係を深めるための最初の重要な一步は、自分の罪深さを認識することですが、良心こそが、悪魔の嘘と、神の真実を見分けてくれるもので、自分たちが罪人で神の恵みを切実に必要としているということを教えてくれるものです。

彼らは、律法の命じる行いが自分の心に記されていることを示しています。彼らの良心も証ししていて、彼らの心の思いは互いに責め合ったり、また弁明し合ったりさえするのです。(ローマ 2 章 15 節 新改訳IV)

私たち人類は、生まれながらにして完全に罪深いという共通の遺産を背負っていますが、神の恵みによって、その罪深さに気づきます。まず自らの罪深さに気づくことは大きな一歩です。

罪という壊滅的な問題の解決策を求めて、神に従おうとするすべての者たちが神を求めることになります。私たちを支配する罪、私たちを肉の死に導いてしまう罪、何らかの方法で消し去られない限り、私たちの永遠の究極の罰をもたらす罪。この罪と死を意識するからこそ、私たちは神を求めようとするのです。

しかし、神を求めるには、神の御心にかなう方法で求めなければなりません。人間が罪を償うことも、罪を補うことも、罪を隠すことも、神にとって十分ではありません。神の最愛の御子の血だけが受け入れられる罪の代償なのです。

どんな儀式も、どんな善行も、どんなに祈ったり、働いたり、歌ったり、唱えたり、自己犠牲を払ったり、断食したり、その他の人間のエネルギーを使ったどんな活動も、私たちを神に一步でも近づけるものではありません。

私たちを罪から救うことができるのは、**神** が御子の犠牲を通して私たちのためにして下さったことだけであり、私たちが神の定めた方法でその犠牲を受け入れる場合だけです: 今日も、明日も、そして永遠に、キリストを信じ、信頼し、従うという単純な従順さです。

アダムとエバは自分たちの罪を意識していました。 壮大な視界が与えられたわけではなく、彼らの目は自分たちの罪深さ、自分たちの罪だけを見るように開かれたのでした。裸であるとわかって、恥ずかしいと思うようになったのです(罪のない世界では不要なことでした)。

しかし、罪を自覚することは、神との和解の第一歩に過ぎません。私たちの行動ではどうにもならず、神がそれをしてくださるのを待たなければなりません:

人は、十字架以降に生きる者たち(私たち)にとって事実となった御子の働きに対して、また十字架以前に生きたすべての者にとっての御子の約束に対して、信仰、信頼を置かなければなりません。

アダムとエバの場合、残念なことに、彼らは主なる神が園に戻ってくるのを待つことはしませんでした。彼らは自分たちで問題を「解決する」ことにしたのです。罪という問題を取り除くために、何かを「する」ことに決めたのです。裸というやっかいなものは手早に目立たないものにし、簡単に覆うことができました。

わたしがアダムのように、自分の罪を覆い隠し、自分の不義を胸の中に秘めたことがあるなら...(ヨブ記 31 篇 33 節 フランシスコ訳)

そこで、最初の男女は、園に生えている木から適当な大きさの葉っぱを取り、衣服を作る作業に取り掛かりました。彼らが新しい発明品を身につけた後も、罪の意識は消えず、死すべき身体を通して子孫に引き継がれた罪も消えませんでした。

しかし、少なくとも彼らはその問題を覆いました。もしかしたら神は気づかないかもしれない…。もしかしたら神は容認してくれるかもしれない…。彼らが思いついてした事は、今の私たちには馬鹿げているように見えるかもしれませんが、イチジクの葉で罪を覆い隠すことは、その時以来ずっと行われてきたことで、現代において同じことがなお徹底的になされている最中であることに気づくべきです。すなわち、悪に染まった世界

の問題を手っ取り早く解決して、何とかこの邪悪な世界を神と和解させようと突っ走って、全能の神のみ前で点数を稼げているのです。

サタンは、人々、特にクリスチャンに、この世の問題を「解決」するような計画や活動に巻き込まれるように促しますが、それは主ご自身の再臨によってのみ根絶される不治の病、悪の癌をイチジクの葉で覆うようなものです。

では、何が本物のクリスチャンの行為で、何が悪魔の「善意の人」の手にかかっているものなのかを、どうやって見分けることができるのでしょうか？自分のいるところで、これを適用してどう見分けるかは、読者の皆さんにお任せします。実際にその状況に関わっている人だけが、正しい判断ができるからです。

何が主の受け入れられる奉仕となり、何がそうでないかを判断するための非常に「一般的な基準」を挙げるなら、それは個人的な奉仕(たとえば、主の名の下に与えられる一杯の水)のようなものは、何か(身近な信者の集まり以外の)組織的に運営されている奉仕よりも、主に受け入れてもらえる可能性はより高いと言えるでしょう。

最終的には、霊的に成長し、神を求め、神の言葉を通して神に近づいているクリスチャンだけが、神の目から見て何が本当に良いことなのかを一貫して見分けることができる可能性があります(ローマ 2 章 18 節; 14 章 22 節; 第一コリント 11 章 28 節; 第二コリント 13 章 5 節; ガラテヤ 6 章 4 節; エペソ 5 章 10 節; ピリピ 1 章 10 節; 第一テサロニケ 5 章 21 節)。

あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。(ローマ 12 章 2 節)

3. 裁き:

彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。彼は答えた、「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」。

神は言われた、「あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。食べる
など、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか」。人は答えた、
「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」。(創世記 3 章 8-12 節)

主なる神が園に現れたことで、罪を犯したばかりの最初の両親(アダムとエバ)の自分勝手な思い込みは崩れ去り、代わりに恐怖だけが残りました。自分の罪を隠そうとしていた彼らは、自分たちの立場に気づき、神への恐れを抱き、無駄なことなのに何とか神から隠れようとします(ヘブル 4 章 13 節)。

彼らのとった行動は、よくわかります。私たちの誰でも、突然神ご自身に直面したら、自分達の都合のよい勝手な言い分は、イチジクの葉のようにしおれてしまうことでしょう。

その時わたしは言った、「わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。
わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者である
のに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」。(イザヤ 6 章 5 節)

エバの行動に見られる罪の影響は、主なる神の問いかけに対するアダムの反応にも同様に表れています。ほんの数時間前には、エバがいないなら、不死の人生は耐えられない、エバと一緒に死の苦しみを味わうと思ったアダムが、今度は、その愛する人に、すべて責任転嫁することを何とも思わないのです。これはよく滑稽なこととして話のタネになりますが、アダムの裏切りの深刻さを見落とすことはできません。

アダムは自分が罰せられないように、妻のせいにするなら、主なる神からの迅速で恐ろしい罰を彼女が受けるかもしれないことを、この時点で知っていました。しかし、罪の影響にすでに蝕まれていたアダムは、ちょっと前にすべてを犠牲にしても共にいるつもりだった女性がどうなってしまいかよりも、自分の身を案じるようになったのです。

アダムの「わたしと一緒にしてくださったあの女」という言葉は、エバへの責任転嫁であると同時に、神への薄っぺらな非難でもあります。このように、自分の責任を他人(特に神)に転嫁する性質は、罪深い人間によく見られる特徴です。

アダムは、エバを自分に与えたのは神なのだから、自分の罪は神の責任だとほのめかしていますが、これは驚くべきことです。神は私たちに、命と肉体と資源を恵み深く与えて下さいますが、それらが与えられなかったら罪を犯さなかったはずだと言い、自分達の罪とその結果として自分の身にふりかかるものは、神の責任だと言うのです。

とんでもないことです！これは、陶器が陶器師を非難するようなものです(イザヤ 29 章 16 節; 45 章 9 節; 64 章 8 節; エレミヤ 18 章 4-6 節; ローマ 9 章 20-21 節)。しかし、ほとんどすべての言い訳の根底には、**神が自分たちを造ったのだから**といって、自分の悪行の責任を神に転嫁しようとする悪魔的な策略が潜んでいて、これはアダム以前からあるものです。

そこで主なる神は女に言われた、「あなたは、なんということをしたのです」。女は答えた、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」。主なる神はへびに言われた、「おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最ものろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを<英文では head-on「真正面から」>砕き、おまえは彼のかかとを<英文では from behind「うしろから」>砕くであろう」。(創世記 3 章 13-15 節)

アダムは責任を回避するために、主なる神からの非常に率直な質問(「食べたのか」)に対して、自分勝手な弁明(エバが私にその実を与えましたが、エバを私に与えたのはあなたです)の前置きを言い、非常に回りくどい方法で答えました。

しかし、主なる神の問いかけに対するエバの答えは、それほど複雑ではありませんでした。エバは、蛇に騙されて食べてしまったという事実だけを述べています。アダムが神の質問に答える前に、弁明をする必要があったのには理由があります。アダムの罪は、神の禁止事項の詳細、問題点、そして自分の行為がもたらす結果を完全に承知した上での違反によるものでした。アダムには弁解の余地がなかったので、罪悪感から弁解の余地を作ろうとしていたのです。

一方、エバには言い訳があったので、前置きなど必要はありませんでした。これは、エバの行為が許されると言っているわけではありませんが(完全に知っていて犯した場合でも、嘘で欺かれてした場合でも、罪は罪です)、アダムの罪はどう考えても明らかに許されるものではなかったのです。

アダムが自分のしていることと、その影響を完全に知っていながら罪を犯したゆえに、人類全員に及ぶ罪がエバによってではなく、「アダムによる」とされている(つまり男性の血筋を介して:ローマ 5 章 12-21 節)理由なのです。

蛇は、これまで見てきたように、ただの動物でした(今もそうです)。しかし、サタンが人類を最初に攻撃するために選んだ器だったのですが、蛇は、(エバを誘惑した)その悪魔と共に、人を惑わすものの象徴となりました(現在もそうです)。なぜなら、このしなやかで繊細な生き物を、地を這う害獣のように貶(おとし)めたことは、悪魔の狡猾なやり方を思い起こさせ、記憶に留めることになるからです。つまり、悪魔は隠れていて、機会があればいつでも攻撃できるように毒蛇のように待ち構えているのです。

主なる神は、女の子孫(イエス・キリスト：創世記 22 章 17 節, ガラテヤ 3 章 16 節 参照)と蛇の子孫(サタンに従うすべての者、特に反キリスト)との間に、将来敵対関係が生じることも予告し、この裁きがより広い意味を持つことを確証しています。

キリストの悪魔に対する(十字架で達成された)真正面からの攻撃と、キリストに対するサタンの休むことのない卑劣極まりない戦略、そして(人類の歴史のすべての世代、特に反キリストの下での苦難の時代における)キリストの従者らについての預言は、しばしばプロテヴァンゲリウム(*protevangelium*)と呼ばれます。

女の子孫であるキリストは、蛇を正面から攻撃するために、真の人間性を身につけることがここで明確に予見されています。蛇の頭を打ち叩くことによって、罪深い人間に対する悪魔の力を真っ向から破壊することになるというこの預言は、サタンが人間を墮落させて獲得した支配権がついに十字架によって破られた時、成就しました：

このように、子たち(すなわち、神によってキリストに与えられた信者たち：13 節)は血と肉と共にあずかっているのも、イエスもまた同様に(すなわち、処女で生まれたので罪がないという点だけではなく)、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、**ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解放するためである。**(ヘブル 2 章 14-15 節)

アダムとエバが罪を犯したとき、**三つの死** が彼らの人生の新しい現実となりました。

1) 彼らは即座に**霊的な死**を体験しました。それは、私たちが罪と不義のために、義である聖なる神から死んだものとみなされた状態です。神は、ご自身の完全さゆえに、もはや私たちとは何の関係も持たないことになっても当然でした(しかし、キリストの十字架上の救いの御業を、ただ信仰に基づいて受け入れることによって、私たちは苦境から救われるという、神ご自身の恵みの契約を立てて下さいました)。

主なる神の明確な命令に背いて禁断の果実を食べたことで、最初の両親は神との関係は損なわれ(霊的な死)、(イチジクの葉で、自分たちの過ちを覆っても答えには

ならなかったように) 罪によって<神と>隔絶してしまったことは、どうすることもできませんでした。アダムとエバが神の約束の種<イエスキリスト>を受け入れ、信頼することにより、神の条件の下で和解が成立することになりました。

2) 二人の身体も罪を犯した途端に死を免れないものとなりました。果実を食べた直後から、腐敗と退化のプロセスが始まったのです。アダムとエバ、そして多くの子供たちは、この前世の環境下では、私たちの基準からすると非常に長生きでしたが、1000 年生きても不死に比べれば微々たるものです。

主なる神が明らかに命じておられたことに背いて禁断の果実を食べたことで、彼らの肉体もやがて滅びることになりました(**肉体の死**)。信仰による神との関係の回復の約束があっても、死の定めは取り消すことはできませんでしたが(ヘブル 9 章 27 節)、神は彼らの救い主の犠牲によって救われることを約束しました。

主なる神が、彼らが自分で作った覆いではなく、「皮の衣」で装って下さったこと(創世記 3 章 21 節)は、キリストの十字架の働きを明確に予見しています。私たちが良かれと思う行動(イチジクの葉)ではなく、神は私たちの罪の代償としてのキリストの血だけを受け入れられます。

私たちに服を着せるために、動物が殺され、その血が流されたのは、私たちに代わって行われたキリストの死の象徴です(そして、このような動物の生け贄は、その成就の日まで、キリストの十字架の死の重要な象徴であり続けました)。私たちの最初の両親がそうであったように、私たちはまた、肉体の死を超えて復活の命に与るためには、自分の傲慢な汚れた「善行」に頼るのをやめ、代わりに神の解決策であるイエス・キリストに信頼しなければなりません(ヘブル 2 章 14-15 節)。

3) 霊的な死の結果として、アダムとエバは神の命から遠のくことになりました(エペソ 4 章 18 節, ローマ 5 章 10 節, エペソ 2 章 12 節参照)。肉体的な死が決定されているので、地上に永遠に住むことはできません(ヘブル 9 章 27 節)。そのため、約束の子孫<イエス・キリスト>における神の解決策を信仰をもって受け入れない限り--地上の人生の終わりに、すでに宣告されている**永遠の死**が、避けられないものとして直面することになります。

常に明確にされているわけではなく、意図的に曖昧にされていることも多いのですが、私たち人類共通の遺産であるこの三重の死は、いずれ誰もが意識することになるものです。私たちの良心は、自分が完全な神が求めておられる神聖さにどれほど及ばないかを告げています(ローマ 2 章 14-16 節)。

そして、私たちは、私たちの共通の運命である、恐ろしくて悲劇的な人生の終わりを十分に認識しています。人間が死に対して恐れや恐怖を抱いてしまうのは、自分の力であがいても、あの世には良い結果が待っていないことを、心の奥底で理解していることのしるしです。

この恐怖こそが、悪魔の最強のトランプのエースなのです。悪魔はこの恐怖に、数え切れないほどの人々を陥れ、救済と解決を約束する様々な偽りの宗教に誘い込んできましたが、そこにはキリストはいませんでした。イエス様だけが、ご自身とその復活を信じる者に、この恐怖から逃れる力を与えて下さるのです。

つぎに女に言われた、「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子[原文は「息子ら」]を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い<新共同訳では「求め」新改訳では「慕い求め」>、彼はあなたを治めるであろう」。(創世記 3 章 16 節)

アダムとエバは、蛇が受けたように、罪の結果を刈り取り(三重の死)、さらに、それぞれ、自分の罪の性質に応じた裁きが加えられました。エバに加えられた罰の一つは出産の際の痛みですが、その理由は、より分かりやすいものです：罪深い世界において罪のある人が、受胎の瞬間から罪を持っている子供を産むので(詩篇 51 篇 5 節)、産む過程で痛みが伴うのは納得のいくものです。

二つ目の罰は、はるかに論議を呼ぶもので、少し説明が必要です。「求め」と訳されているヘブル語の単語、テシュカ teshuqah (hqvwt) は、ここでは女性の性欲を意味していません。エデンの園での結婚は、楽しいものであり、シンプルなものでした。アダムは「一家の長」と呼ばれていたかもしれませんが、これまで取り上げてきたように、罪のない二人の間の完璧なパラダイスでは、どちらが権限を持つかと言うような問題はなかった事でしょう。しかし、園の外での不完全な人間同士の間では、結婚を含むすべての組織には明確な上下関係が必要です。

エバ(と、すべての女性)が、自分から進んで他人の権威の下に身を置く動機は何かと考えてみて下さい。特に、その相手が不完全で罪深い人であることを考えるとなおさらです。蛇やアダムがそれぞれの罰を受けたのと同じように、エバの罰の一つは、夫や結婚、子供を「求めること」です(「あなたは夫を慕い求めるでしょう」という言葉の意味です)。

男性が妻や結婚、子供を望まないというわけではありませんし、女性もこの呪いがなければ、結婚を望まないという訳でもありません。しかし、結婚はすべての当事者に

とって犠牲を伴うもので、多くの意味で女性にとっては、はるかに大きな犠牲を伴うものです。

結婚を成立させるために、女性は自分の自由を多く放棄しなければならないからです。創世記 3 章 16 節の「求める」ということがなければ、世界の歴史上、夫に「支配される」という代償を払ってまで結婚をしようとする女性のはるかに少なかったと思われます。

更に人に言われた、「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る」。(創世記3章17-19節)

アダムの罰も罪に見合ったものでした。アダムは、何の努力もせずに楽園の素晴らしい食事を楽しんでいましたが、配偶者を失うかもしれないというプレッシャーの中で、神である主が禁じておられた一つの果物を食べてしまいました。その結果、アダムはこのたった一つの不従順な行為によって、エデンの園の自由な恵みに終止符を打つことになりました。

これ以降、アダム(とその子孫)は生きていくために働かなければならなくなったのです。地は耕す努力なしには収穫できなくなり、人間が世話をしなくても実を結んでいた植物も、アザミやイバラにふさがれることになりました。

労苦の人生の終わりには、勝利に満ちた達成感ではなくて、自分の体と地上で成し遂げたすべてのことが風化してしまうのです。アダムは禁断の実を食べる前に、死が生じることを理解していましたが、この最後の呪い、つまり労苦の果てに虚しさが待っていると言う事はおそらく、大きな虚無感を感じさせるものとなったことでしょう(伝道の書 2 章 22-23 節他参照)。主にあつては、私たちの努力が無駄ではないことを神に感謝します(第一コリント 15 章 58 節; ガラテヤ 6 章 9 節; 第一コリント 3 章 10-15 節参照)。

さて、人はその妻の名をエバと名づけた。彼女がすべて生きた者の母だからである。主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた。主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、

永久に生きるかも知れない」。そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた。(創世記 3 章 20-24 節)

女から生まれる子孫の約束に関するものとしての毛皮については前述しました。動物のいけにえは、モーセの律法で命じられていただけではありません。それは異邦人の時代にも存在していますが、この原点にまで遡ることができます(参照:創世記 4 章 4 節, 8 章 20-21 節, 15 章 8-21 節)。血を流して命を失うことは、キリストが私たちに代わって死から救い出すための身代わりの痛ましい死を明示しています(第一コリント 5 章 7 節後半)。私たちはどうしようもない罪の猛威にさらされていますが、それは、神による私たちのためのイエス・キリストの犠牲によって、裸の恥を取りさっていただくまでのことです。

私たちは、アダムとエバが罪を犯したことによって、自分たちとその子供である私たちに三重の死の呪いがもたらされたことを見てきました(神から離れるという霊的な死、肉体的な死の必然性、そして救いの提供がなければ最終的には永遠の死という刑罰)。また、上記の男女別の呪いがもたらされたことも見てきました。しかし、彼らの罪には最終的なもう一つの結果が伴いました。主なる神の戒めに従わなかったことで、彼らはエデンの園に住む権利を失ったことです。

霊的に死んだ罪深い生き物が、永遠にパラダイスで生きることは考えられません。そのような状態は、宇宙の膿んだ癌のようなもので、解決に至るものではありません。永遠の命は、完全な人(アダムとエバ)か、(イエス・キリストへの信仰によって最終的に私たちがそうなるように:ヘブル 12 章 23 節後半参照)完全にされた人にしか適用されません。

不完全な楽園は不安定なものとなり、その状況を解決するためには、神は結局(激しい裁きによって)対処しなければならなくなります。さらに、肉体の死が迫っているという確実な知識がなければ、自分の罪深い生き方や、罪と死から解放して下さる救い主の必要性を考える動機にはなりません。

完全な状態にあったアダムとエバが、善悪を知る木に手を出してしまったように、罪深い人類がエデンを追放された後に、命の木から取って食べるかもしれなかったため、神は「ケルビムと回る炎の剣」を園の入り口に置き、命の木に手を出さないようにさ

れました(エゼキエル1章 13 節参照)。³⁹ これは、ケルビムによって運ばれる、燃える剣を持つ神の戦車に関連するものです。神の聖なる御座であるこの戦車は、神御自身の御臨在を象徴しています。

悲しいことに、最初の親にとっては、はじめ祝福であった神のご臨在は、今や、恐ろしく畏怖の念を抱かせるものとなり、永遠の命へのアクセスは阻止され、彼らの良心は、差し迫る裁きと罪の意識をもたらすものとなってしまいました。感謝なことに、神様は、御子イエス・キリストの犠牲によって、御自分の子供たちである私たちが命の木に戻る道を与えて下さいました。私たちが、永遠の命の実をもう一度食べることができるように、十字架の木の上で私たちへの裁きを耐え忍んで下さったのです。

V. サタンの虚しい勝利

サタンがアダムとエバにしたことは、以前に彼が多くの人々にしたこととよく似ています。つまり、神の権威を拒んで、サタンの魅惑(と彼の価値)に惹きつけられるようにしたことです。このような行いをするのは、神の権威の代わりに悪魔の権威を受け入れているに等しいことであつたのですが、アダムとイブは分かりませんでした(おそらく、彼に従う多くの天使たちも完全には理解していないのでしょう)。

しかし、この事実は、悪魔の計画の中心となるものでした。実際、今日の悪魔の典型的な手口は、まず対象となる人々を神(およびその人が保持している可能性のある他の善良なもの)から引き離し、善良なものを拒絶した当然の結果として悪の道を歩ませるというものです。

サタンは、天使の大部分を支配するために使ったのと同じ手段(すなわち、欺き)によって、かつて(一時的に)持っていた地球の支配権を取り戻しました。<このシリーズの第二章「創世記のギャップ」を参照のこと>

<悪魔は主に>言った、「これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられて<英訳では surrender「明け渡されて」>いて、だれでも好きな人にあげてよいのですから。(ルカ 4 章 6 節)

³⁹ 本シリーズの第 1 回「サタンの反逆と墮落」を参照。

上記の引用箇所にあるギリシャ語の動詞パラデイドミ(παράδωμι「明け渡す/降伏する」)は、サタンの地上への支配は、神から奪ったものでもサタンに与えられたものでもなく、むしろアダムが、放棄したもの、放棄させられたもの、アダムが果たすべき義務を怠ったことでサタンに「明け渡されて」しまったものであることを意味しています。

神の権威を損ない、人を墮落させ、それによって人類(および人が所有するすべてのもの)を支配するという悪魔の方針は、神に反抗してサタンに従った天使たちと同様に、アダムとエバにも有効であることが証明されました。最初の人間が義務を果たさなかった結果、「全世界は悪しき者の配下にある」(第一ヨハネ 5 章 19 節)のです。

アダムは、創造主ではなく被造物に耳を傾けたことで(ローマ 1 章 25 節)、地球に対する人類の支配権の大部分を失ったのです。園を出たアダムとエバは、痛みと労苦と究極の肉体的な死の世界に入っただけでなく、そこは、悪魔の影響が蔓延する世界でもあったのです。この世界はエデンとは違い、目に見えない神の保護だけが、取り巻く悪魔の破滅の力から守り、(善悪を知ったことによる罪の意識によって)神を熱心に求めることだけが、死の運命から彼らを導き出すことができるのです。

サタンは人間を自分のレベルにまで引きずり落としました。悪魔とその配下の者たちが、神の死刑執行を待つ状態の下にあるように、墮落後の人間も、命の短さに制限されてはいるものの、同じように刑罰執行を待つ状態に陥りました。

しかし、悪魔が勝利の喜びに浸っていることは許されませんでした。以前の反乱の時と同じように、彼は一つの戦闘には勝っても、戦争には負けているからです。救い主(皮の衣でその犠牲が予示された、女の子孫)の到来が即座に告げられたことで、地球の破壊の後になされた再創造の際と同様に、サタンは完全に面喰いました。繰り返しになりますが、全知全能の神は、悪魔が反撃を思いつく前にすべてを計画されていたのです。

天使らは人間のような知的、時間的、物質的な限界を持っているわけではないので、サタンに従った天使たちは「心変わり」する傾向がなく、むしろ反乱を起こす時には、神への反抗に堅く固執してしまうことになります(このシリーズの第 1 部で見してきました。上記の IV.1.a も参照のこと)。⁴⁰

⁴⁰ 「出エジプト記 14 章：ファラオの心を硬くする」の第 2 回をご覧ください。

一方、人間は、天使に比べ、無知な状態で生まれ、時間的・物質的に厳しい制限を受けていましたが、自分の死すべき運命と罪深さに気づいて、「わたしたちの罪過のために死に渡され、わたしたちが義とされるために、よみがえらされた」(ローマ 4 章 25 節) 救い主イエス・キリストにおける神の救いの恵みに応答する可能性を持っています。)

いよいよ本格的な戦いの始まりです。悪魔は即座に新しい状況を把握しました。自分の勢力を結集して対抗しなければ、これから現れる人類は、神と、約束された救い主に立ち返ってしまうことになります。最初のアダムが失ったものを回復する運命にある最後のアダムが、人類を罪から救い、サタンが奪取したばかりの世界の支配権を取りあげてしまいます。それこそ、悪魔が、最初の男と女が園で子孫を増やしていくことの結果として恐れていたものでした。つまり、自分と自分に従う者たちが、(神に反抗しなく、神に従うことを選ぶようになる) 従順な生き物の新しい種族に取って代えられ、神による地上の支配が永遠に再確立され、自分達は最終的な罰を受けるために、永遠の火の池に送られることになることです。

というわけで、この後の悪魔の戦略はすべて、それに反抗するためのものです。次のシリーズでは、サタンの必死の対抗策、すなわち、人類の目をくらませ、神の真理を求めようとするすべての人々に、徹底的に対抗するためにもくろまれた世界のシステムについて見ていきます。

—以上「サタンの反乱 艱難期への序章 第三部」終わり